

「同一化」作用の矛盾について

坂 元 忠 芳

はじめに

いま、わが国では、「臨教審」の答申をめぐる、教育制度改革の問題が多くの人びとによって論議されている。そうした論議のなかにはもちろん、「臨教審」の答申にたいする賛否の意見がふくまれている。そして、そうした意見の根底に、学校教育だけでなく、家庭、地域、社会における生活・文化・教育のあり方や、さらに国家の政治・経済・文化・教育をめぐる政策のあり方についてのするどい対立がふくまれていることは、容易に感得されるところであろう。

しかし、いずれにしても、そうした意見の対立が、現代日本において、様々な要素のからみ合いから、子ども・青年の人的成長・発達に危機的状況がもたされていることとするべく関連していることは確かなことであろう。近年、教育制度改革の論議の直接のきっかけとなっている、受験競争の激化にしてもまた、校内暴力や家庭内暴力、さらに「いじめ」や非行にしても、低学力、高校中退にしても、それらは、そうした危機的状況のするどい一角にすぎないが、そうした事実の底辺に、ひろく、子ども・青年の人格形成の矛盾が進行していることは間違いないことであろう。

ところで、このような子ども・青年の人的成長・発達の危機をもっとも端的に示すものは、彼らが、成長・発達の途上で、人間的な関係を取り結ぶことがきわめて困難となり、他者への関係の疎外ばかりでなく、自己への疎外が、複雑かつ普遍的なものとなり、彼らが生活のあらゆる場面に浸透・貫徹してきていることであろう。

子どもははやくから、他者の中に自己を見出すことができず、互いの関係を

引き裂かれながら、自己のなかに安定したもう一人の自己＝他者をつくり出すことをさまたげられて、いらだち、苦しんでいるといったらいだろうか。

ところでこれらは、一口に言って、子ども・青年の人格における「同一化」(identification) 過程の危機の様相の深化をさし示すことがらだろうが、それは、自己が独自の主体的な自己であること、つまりは、「アイデンティティ」(identity) をもった一個の人間であることを意識することが困難になっている事実を端的に示すものであろう。

そこで、本論文では、現代における、新らしい、より人間的な「同一化」作用を可能ならしめる教育実践の基本構造を明らかにする前提として、子ども・青年の「同一化」作用の危機の問題をその矛盾の展開構造に焦点をあててさぐってみたい。

まず、自己が他者に「同一化」するとは、そもそもどのような人間形成における作用であるのかをとらえかえすことから出発し、それが近代市民社会において、どのような基本的矛盾をかかえ、それらがどのような諸相をもって展開され、どのように危機的様相をはらんでくるか。その論理をいくつかの問題にそくして明らかにしたい。本論文は、その意味で、現代日本における人格の「同一化」作用の危機についての考察の前提となる部分を主な内容としている。したがって、現代日本の子ども・青年の「同一化」作用の構造については機会をあらために論じたいと思う¹⁾。そのことをはじめにおことわりしておきたい。

- 1) この点については拙稿「個性の形成と教育実践の視角」『教育』1985年9月号、「現代における子ども・青年の発達の危機について—「商品化」、 「物化」—「物象化」の視点から—」(上)・(下)『教育』1985年10月号、1986年1月号を参照。

(1) 「同一化」作用における基本的矛盾について

「同一化」(identification) とは、心理学の立場、とくに自我心理学の立場からは、一般に、ある集団及び個人が、他の集団及び個人のある性質を、わがものとし、その手本^{モデル}にしたがって、みずからの性質を、全体的又は部分的に変容していく心理的過程をさしている¹⁾。

- 1) 精神分析の立場からの定義としては、ラプランシュ・ポンタリス『精神分析用語辞典』村上仁監訳、みすず書房、1977年、344 ページ参照。(Vocabulaire de la psychanalyse Par Jean Laplanche et J.-B. Pontalis 5^e édition, P. U. F. 1976)

その場合、集団及び個人というのは、家族、親戚、近隣、地域社会、学校、文化・宗教団体、政党などから、さらに、民族、国家にいたるまでの、様々なレベルでの集団とそれに属する個人、つまり、現実的に存在する個人及び集団を指すだけでなく、伝説、歴史、物語、さらには小説、詩、映画、演劇などに登場する、多かれ少なかれ、観念化され、また仮空（空想）化された集団及び個人を指し、したがって、それは実在性、現実性だけでなく、観念性、仮空性を含んでいる。

また、「同一化」作用は、ある集団及び個人によってわがものとされる性質間の「牽引」と「反発」において具体化される。「同一化」の対極は、「拒否」(rejection) であるが、「同一化」は、程度を異にした「牽引」と「反発」から「拒否」にいたるまでの、様々な諸性質間の^{ダイナミズム}力動性としてあらわれる。

さらに、「同一化」作用は、ある集団及び個人が自己を他者に「同一化」する場合（異化的又は求心的「同一化」）と、他者を自己に「同一化」する場合（同化的又は遠心的「同一化」）とをふくんでいる¹⁾。

- 1) ラプランシュ・ポンタリス、前掲書、344 ページ参照。

そして、いずれの場合にも、多かれ少かれ、「受動的」「消極的」のものと、「能動的」「積極的」のものとを含んでいる。

また、「同一化」作用は、空間的広がりの中で進行するが、その際、「同一化」する両者が、空間的に近づくことが、「同一化」を促進することもあるれば、遅滞・妨害することもあり、また、その逆もある。「同一化」する両者の、「空間的距離」と「心理的距離」とは同一ではない。

さらに、「同一化」作用は、時間的経過の中でおこなわれるが、かって「同一化」したことがらを、後にいっそう強固にする場合もあれば、かって「反発」「拒否」したものを、後に「同一化」する場合もある。そして、その

程度も、様ざまである。「同一化」作用の程度が強いために、後に「反発」「拒否」が大きくなる場合もあれば、その逆の場合もある。

こうして、「同一化」作用とは、元来、そのなかに、多様な矛盾をふくんだ心理作用であり、作用の内容、性質、方向、勢力、場、経過などによって、「实在性—観念性」「現実性—仮空（空想）性」「牽引性—反発性」，「求心性（異化性）—遠心性（同化性）」，「受動性—能動性」，「接近性—離反性」，「瞬間性—持続性」などの対立項をふくんでいる。

しかし、「同一化」作用の矛盾・対立は、このように、集団及び個人相互にあらわれる性質間の矛盾・対立にとどまらない。「同一化」とは、すでに述べたように、ある集団及び個人が他の集団及び個人の性質をわがものにする事としてあらわれるのであるから、それまでにわがものとした性質相互の、そして、わがものとした性質とこれからわがものとする事になる性質との矛盾・対立をふくんでいる。そして、そのような性質は、発達論的にみて、身体的・情動的・認識的・自我（人格）意識的レベルの、また、それら各おのの「しるし」の相互関係、そして、さらに、意識的・無意識的関係をふくんで成立している。

実は、「同一化」作用の概念は、自我心理学において、主としてこれまで展開されてきたものだが、実際には、「同一化」作用の諸相（「共鳴」「模倣」「感情移入」「一体化」「共感」「精神的伝染」「認識の共有」など）をとおして、集団及び個人の意識的・無意識的作用とかかわって、生物学的・生理学的なものと、社会的なものとの統一や相互連関¹⁾としてこれまで考察されてきたものである。

- 1) 「同一化」作用の研究は、たしかにフロイトからエリクソンにいたる精神分析的心理学において発展してきたものであるが、しかし、それにとどまらない。例えば、これらの動向と関連しながらも、ワロンは彼の発達心理学のなかに「同一化」作用と自我の発達の弁証法を精神分析学とは違った仕方で位置づけている。精神分析学派とワロン学派の自我形成の見解の対立についての考察は別の機会にゆずりたいが、ここでは、さしあたってその一例を以下に挙げておこう。フロイトは、周知のように、自我の形成をイド・自我・超自我の相互対立・葛藤をとおして、生物学的なものと、社会的なものとの間の抑圧—非抑圧の関係においてとらえようとし

た。これに対して、ワロンは、他者の助けがなくては、一時も生存できない新生児の生物学的構造が、元来、社会的なものであることに着目して、自我の発生を、子どもと他者との関係をとおして、子どもの感受性のなかに、自我と他者が一つの対として同時に構成されることを理論づけ、自我の発達を、それらの対立においてみようとした。ワロンにあっては、生物学的なもの和社会的なものとは、フロイトのように二元的に分離されたものとしてではなく、人間関係のなかで一元的に統一されたものとしてとらえられている⁽¹⁾。なお、本稿では、「同一化」作用を、なによりも、子ども・青年をめぐる社会関係のなかでとらえ、それをとおして、精神分析学派の「同一化」作用論を不十分ながらとらえかえしてみたいと思う。

- (1) ワロン『身体・自我・社会』浜田寿美男訳編、ミネルヴァ書房、1983年、第1部「自我と他者—私はいかにして私になるのか—」を参照。(H. Wallon, Niveaux et fluctuations du moi, L'évolution psychiatrique. I, 1956, "Enfance" 1968, 2, n° spécial. p. p. 87—97, H. Wallon, Le rôle de «l'autre» dans la conscience du «moi». J. Egypt. psychol, 1946, "Enfance" 1968, 1, n° spécial, p. p. 279—286. H. Wallon, Les étapes de la sociabilité chez l'enfant, L'École Librée, 1952, "Enfance" 1968, 1. n° spécial. p. p. 309—323)

結論を先どりして言えば、「同一化」作用は、集団間及び個人間の相互作用として現象しつつ、同時に、集団内及び個人内の作用として現象するのであり、「同一化」は集団・個人間的「同一化」及び集団・個人内的「同一性」(ego and group identity)として、つまり、「自己同一性」の矛盾構造として現象するのである。

ところで、この場合、集団・個人間的「同一化」がどのような矛盾・対立によって、集団・個人内的「同一性」または「自己同一性」につながっていくのだろうか。「同一化」作用の研究では、このダイナミズムと弁証法の追及こそが、研究の中心に位置づくはずであるが、このことは、理論的に「同一化」作用が「自我同一性」とどのように関係しているかの問題としてあらわれる。そして、本稿で、「同一化」作用の矛盾の問題を論じるにあたっても、まずはこの事を指摘しておくことが必要である。

というのは、この問題は、本稿の表題を、何故「『同一化』作用の矛盾について」とし、「『自我同一性』の矛盾について」とあえてしなかったかということとも関係している。

ところで、「アイデンティティ」（「自我同一性」）とか「アイデンティティ」の「危機」という概念は、近年、E. H. エリクソンの著作などをおして一般に心理学や教育学の分野で問題にされるようになり、常識のレベルでも、これらのことばが使われるようになったが、ここでとりあえず、エリクソンの概念についてふれておくことが必要だろう。

エリクソンは『自我同一性—青年と危機』¹⁾ (Identity youth and crisis, 1968) や『自我同一性』²⁾ (Identity and the life cycle, 1959, 1980) などで、「アイデンティティ」ということばが、心理学その他で使われるようになった経緯にふれながら、「アイデンティティ」とその「危機」の概念について明らかにしている。彼によれば、「アイデンティティ」とは、「自己自身の中の永続的な同一（自己同一）という意味と、ある種の本質的な性格を他者と永続的に共有するという意味の双方を暗示するような相互関係」を表わし、伝記的・病理誌的・理論的などのさまざまな観点からアプローチされてはっきりしたものとなるものである。ある時には、それは「個人的な同一性の意識的感覚」(a conscious sense of individual identity) を述べるという形を、またある時は「個人的な性格の連続性を求める無意識的な志向」(an unconscious striving for a continuity of personal character) の形で、さらに、三番目には、「『自我総合』(ego synthesis) の無言の働らきに対する一つの規準」として、最後には、「特定の集団の理想と『同一性』との内的な『一致』（「連帯」）(an inner solidarity with a groups ideas and identity) の「維持」という形をとるものである³⁾。

1) 訳書に『主体性アイデンティティ「青年と危機」』岩波庸理訳、北望社、1969年がある。

2) 訳書に『自我同一性』小此木啓吾訳編、誠信書房（新装版）1982年がある。

3) E. H. Erikson, Identity and the life cycle, W. W. Norton & company, 1980, p. 109. (E. H. エリクソン『自我同一性』小此木啓吾訳編、誠信書房、1982年、132ページ。)

したがって、「アイデンティティ」の「危機」とは、こうした、さまざまな意味あい（しばしば多義的に使われる）における「意識感覚」や「連続性」「総合」や「一致」の「危機」のことである。

要するに、「アイデンティティ」とは、集団及び個人が社会的にとる役割へ

の信念とそれが集団的及び個人の中につくりだす「同一」(sameness)と「連続性」(continuity)の感覚のことであり、その「危機」とは、そうした社会的役割への「信念」(belief)やそれがつくりだす「同一」と「連続性」の「危機」のことである¹⁾。

1) E. H. Erikson, op. cit., p. 42 (E. H. エリクソン, 前掲書, 38ページ。)

エリクソンによれば、したがって、「アイデンティティ」とは、たんに個人的な「唯一性」を保つ意識的な感覚にとどまらない。それは、集団及び個人が社会のなかで、経験の「連続性」と「同一性」とを求める無意識の努力をもふくんでいる。エリクソンにとっては、「アイデンティティ」は集団及び個人が意識的・無意識的に「同一化」した性質のたんなる「総和」ではない。そうではなくて、それは、いわば、そのような性質をわがものとした集団及び個人が、その他の集団及び個人にたいする「内的整合性」を維持する役割をもつような「自我統合」(ego synthesis)の感覚である¹⁾。

1) ポール・ローゼン『アイデンティティを超えて』福島章・高原恵子・大沼隆博訳 誠信書房, 1984年, 30ページより引用。(Rozen, Erik, H. Erikson, the power and limits of a vision, 1976 なお原文は E. H. Erikson, Identity and the life cycle, New york, International Univerity Press 1959, p. 102.)

エリクソンは、このことを思春期以後の問題として次のように述べている。

「自我同一性という形で、まさにおこなわれようとしているこの統合は、児童期の種々の『同一化』の総和以上のものである。むしろ、それは、うまくいった同一化が各個人の基本的な欲動 basic drives と、自分の素質 endowment や機会 opportunities との統合に成功する際に、次々に継起する各発達段階の諸経験すべてから獲得される内的な首府 [inner capital] である。精神分析では、このような成功した結合を自我統合 ego synthesis に帰する。今まで私は、児童に生まれた自我の諸価値 ego values が、自我同一性の感覚 a sense of ego identity と私が呼ぶもののなかで頂点に達することを明らかにしようと努めてきたが、この時には体験される自我同一性の感覚とは、内的な不変性と連続

性を維持する各個人の能力（心理学的意味での個人の自我）が他者に対する自己の意味の不変性と連続性とに合致する経験から生まれた自信のことである。それぞれの主要な危機の終りにこのようにして確証された自己評価self-esteemは、たしかな未来に向かっての有効な歩みを学びつつあるという確信に、つまり、自分が理解している社会的現実の中にはっきり位置づけできるようなパーソナリティを自分は発達させつつあるという確信に成長してゆく。」¹⁾

- 1) E. H. エリクソン『自我同一性』小此木啓吾訳編，誠信書房（新装版）1982年，112ページ。（E. H. Erikson, Identity and the life cycle, p. p. 94—95.）なお，〔 〕は筆者の付与。

ここでエリクソンが「各個人の能力が他者にたいする自己の意味の不変性と連続性に合致する経験」（傍点筆者）と呼んでいるものは、一般に、個人が他者との関係のなかで「自己統合」を可能にする社会的役割をとおして具体化されていくものであるが、エリクソンは、それを可能にするものこそ、「アイデンティティ」と呼ぶのである。したがって、エリクソンにとって、「アイデンティティ」の「危機」とは、何よりも、社会の問題性がつくりだす、彼の役割における「危機」のなかにあらわれ、それが、個人及び集団の統合感覚の「危機」へと具体化される。エリクソンは、この両者を、具体的な分析をとおして統一的に描きだそうとするが、そこで何よりも重要なのは、「アイデンティティ」の「社会的定義」である「役割」の概念と、個人及び集団が内的に「連続性」と「同一性」を保ちうるということとが、どう関連するか、ということである¹⁾。

- 1) A & M. ミッチャーチヒ『喪われた悲哀』林峻一郎・馬場謙一訳，河出書房新社（新装版）1984年，357ページ参照。（A & M. Mitscherlich, Die Unfähigkeit zu trauern, 1969）

ことばをかえていえば、「アイデンティティ」の形成にとって、「衝動願望」と「社会の要請や要求」とがどのように関連するかという問題である。この問題は、いうまでもなくフロイト以来の古典的命題であり、フロイトは、こうし

た関連を、人格の二つの部分、すなわち、イドと超自我とが、しばしば葛藤状態に陥り、欲求の満足を求める衝動と社会的環境や良心の要請とが容易に対立するのを認めた。そして、その場合、自我はイドと超自我を仲介し、現実を概観する力をそなえた大審問所として両者の間に挿入されるのであり、この点について、エリクソンは最終的には「衝動願望と社会の要請や要求とが一致するものであることを発見し、そのために、これら二つの領域の間には葛藤が避けられないという考えに反対するに至った」といわれる¹⁾。

1) A & M ミッチャーリッヒ、前掲書、257 ページ。

さて、エリクソンは、このような観点から、社会・心理学的カテゴリーとしての「アイデンティティ」とその「危機」についての具体的展開を『青年ルター』(Young man Luther, A Study in Psychoanalysis and History, 1969) や『ガンディーの真理』(Gandhi's truth, on the origins of Militant Nonviolence, 1969) などをとおして行ったのであるが、私たちは、ここでもう一度、エリクソン自身が「衝動願望」と「社会の要請や要求」との葛藤・対立をどのように止揚・克服しようと考えたか、という問題にかえらなければならない。またそのことは、エリクソンがそれらの葛藤・対立の止揚・克服として具体的に提出している「アイデンティティ」形成の基本的カテゴリーとその理論的わく組み自体をもう一度私たちの立場から再吟味することを意味する。

1) この点については本稿につづいて予定されている論稿で、「アイデンティティ」の形成の段階性をめぐって考察したい。

さらに、そのことは、もういちど、私たちが「同一化」作用の具体的な矛盾の諸相をラディカルに問いなおすことからはじめなければならないことを要請しているといえる。私たちは「同一化」作用の概念から出発して、その諸矛盾・対立が、具体的にどのような問題構造をもち、それが具体的にどのような「危機」を生みだしているかを、もう一度みてみなければならない。そして、そのような問題意識にたって、個々の「同一化」作用とその内的統合機能としての「同一性」との関係、両者の「危機」の関係を再度問う必要があると考え

るのである。これが本稿を、すぐさま「『自我同一性』の矛盾について」としないで、「『同一化』作用の矛盾について」とした所似である。

(2) 「同一化」作用における市民社会的関係について

さて、「同一化」作用の矛盾・対立が、集団及び個人間又は、集団及び個人内のそれとして現象するのである以上、それらは、集団及び個人の社会・歴史的あり方に関わることは必然的である。にもかかわらず、われわれが、最初に挙げた「同一化」作用の矛盾の諸相が、一見いかにも超社会的、かつ超歴史的なものとして映ることをどう理解したらよいのだろうか。ここで、少なくとも次のことを問題にしなければならない。

すなわち、もともと、さきにのべたような「同一化」作用の矛盾の諸相は、超社会的かつ超歴史的な概念であろうか。それともそれ自身が、社会・歴史的な概念の内容を含むものでであろうか。さきに挙げた「同一化」作用における心理学的カテゴリーは、一見したところ、超社会的・超歴史的なそれとして、いわば内容抜きに提出されているように見える。しかしよく考えてみると、もともと「同一化」作用の概念を集団及び個人間の、また集団及び個人内のそれとしてとり出す場合、それらが社会的かつ歴史的であることが前提されているのを見ることはそれほど困難ではない。なぜなら、それらは、個人及び個人間の「同一化」作用を含んでおり、すでに、個人の集団からの独立志向を前提としていること、ことばをかえれば、個人と共同体との「一体性」の分裂を前提としていることを含意しているからである。つまり、個人及び個人間の「同一化」作用がそれとして現象するのは、共同体から個人が分離してくる社会的・歴史的過程、すなわち、いわゆる市民社会的関係の発展を前提としたものなのである。「同一化」作用のなかに、個人を位置づけようとする限り、この概念を、超社会的・超歴史的なものとするわけにいかなくなるのは当然なのである。まして、「アイデンティティ」の概念を「同一化」作用のそれとの関連でとりあげられる場合、それが個人内の「同一化」作用、つまり、「自我同一性」としてあ

らわれることを考えると、たとえば、「アイデンティティ」が、ある時は、「集団的アイデンティティ」としてあらわれることを前提としても、この概念を、まずは個人の共同体からの自立という事実を前提としたものとして位置づけなければならない、したがって、「アイデンティティ」の概念との関係を前提として「同一化」作用の概念をとり上げるということは、そもそも、それを、社会的・歴史的なものとしてとりあげざるをえないことが暗黙のうちに前提されていると考えねばならないのである。

このことは、しかし、煩瑣な、形式的論議なのでは少しもなく、実は、前節でのべた、「同一化」作用にかかわる矛盾の諸相のあり方自体が、社会的・歴史的内容をふくんで成立していることを示している。つまり、即自的なものから対自的なものまでを含む、これら矛盾の、さきに述べたような両極への分化が、「同一化」作用における、自然的共同体からの個人の自立過程そのものを、内容的に表現しているものであり、これらの対項関係のなかに、個人の自然的共同体からの自立・分裂が前提されていると解されるのである。

- 1) 後に何度もふれるように、ここで「自然的共同体」と呼んでいるものは、市民社会以前に存在していた、古代・中世的共同体の性質をもったさまざまなレベルの共同体をさしている。この場合「自然」という意味は、いわゆる市民社会における「人間自然」を一般にさすことがらではなくて、市民社会以前において共同体的関係をつくりだした人間のあり方の性質を全体として表現している。したがってここでは、古代・中世を通しての共同体の質の差異については不問にされており、それらを通底した関係とそのなかでの性質が問題にされている。

さきに、「同一化」作用の概念が、フロイトにはじまる精神分析学のなかで、心理学的カテゴリーとして成立してきたことにふれたが、自我とイドと超自我の三層においてあらわれる、「同一化」作用の諸矛盾が、精神分析の対象としての近代的個人のあり方に深くかかわっていることはいうまでもない。

例えば、さきに述べた「同一化」作用の「実在性—観念性」、または、「現実性—仮空（空想）性」という矛盾のなかに、単純に、自然的共同体における神話作用などに象徴されるような、共同体とその成員との未分化な「一体化」作用がふくまれていると解することはできない。ここで「実在性」、「現実性」が

「観念性」,「仮空（空想）性」と矛盾するというのは、実在的で現実的な関係をとおしての集団及び個人の「同一化」作用と近代市民社会における神話・歴史・物語・小説・映画などの観念的・仮空（空想）的な「同一化」作用とが対立しているという意味である。したがって、「観念性」と「仮空（空想）性」「実在性」と「現実性」との対立には、古代的な神話作用の未分化な「同一化」作用（「同一化」作用の古層）だけでなく、近代市民社会的関係における、フィクション・メディアをとおしての「同一化」作用（虚構—^{リアル}現実的な「同一化」作用）が、ふくまれている¹⁾。

- 1) 市民社会的関係におけるフィクション・メディアの代表的なものとしての近代小説は「観念的」なものでありながら、現実を实在以上にリアルに写し出すことによって、すぐれて、現実性をもっている。したがって、このようなメディアにおいては虚構性と現実性とは互いに浸透し合っている。

また、「牽引性—反発性」という矛盾についてみても、そこに古代の共同体における成員間もみられる、また中世における中間共同体（集団）と全体共同体（集団）間にみられる争いと調停に象徴されるような、やはり、共同体とその成員との未分化な「同一化」作用が、単純に含まれていると解することはできない。「牽引性」と「反発性」が集団及び個人において、即自的・対自的に対立するということは、「同一化」作用が集団及び個人間の完全な反発・分裂的対極において存在するようになるということを前提としたものであり、それは、個人の共同体からの自立・離脱をふくむ両者の矛盾を前提としたものと解される。

他の矛盾・対立については、さしあたって具体的な例を挙げないが、いずれにしても、以上のような「同一化」作用における矛盾・対立の即自的・対自的あり方が、個人が共同体と対立し、したがって前者の後者からの自立における対立をふくむことが前提とされている。

さて、このように考えてくると、ここで問題にしている「同一化」作用の矛盾・対立の考察が、集団及び個人が市民社会的関係を取り結ぶようになる際の、集団及び個人間・内のそれであることについて、いま少し、その前提とな

る社会・歴史的状況にそくして、内容的に考察しておくことが必要である。

それは、「同一化」作用の矛盾にたいする、心理学的考察と社会的考察とを、まさに市民社会的内容において統一的におこなうことである¹⁾。

- 1) この点については、上原専祿、宗後誠也『日本人の創造—教育対話篇—』1952年、東洋書館を参照。

さて、市民社会における個人の共同体からの自立をあらわす指標を、さしあたって私たちは、次の三つのレベルをとおしてとらえることができるだろう。

第一に、市民社会における個人（市民）の（自然的）共同体からの自立は、後に述べるように、市民社会的関係が、社会のあらゆる場面をおおうなかで現象するのではなく、多かれ少かれ、自然共同体的関係から市民社会的関係への個人の移行をふくんで現象するということである。これは、市民社会に残存する、さまざまな共同体的関係、たとえば、ギルド・村落共同体、宗教団体における関係から、市民社会的関係への個人の渡り行きとしてあらわれるが、それをもっともたんに示すものは、家族的関係から市民社会的関係への個人の渡り行きである。

ヘーゲルは『法の哲学』のなかで、家族を「精神の直接的実体性」(die unmittelbare Substantialität des Geistes Einheit) としての愛の「一体性」(Einheit) においてなりたつ関係としてとらえたが、市民社会においては、「直接的もしくは自然的な倫理的精神」から成立する「実体性」は、その「一体性の喪失態・分裂態」へと移ることによって「市民社会」となる、と述べている¹⁾。

- 1) Hegel, Grundlinien der Philosophie des Rechts. Felix Meiner Verlag. S. 149.

ヘーゲル『法の哲学』藤野渉、赤沢正敏訳、岩崎武雄責任編集『世界の名著44』中央公論社、1978年、386 ページ。

ヘーゲルは「家族」を(A)「婚姻の形態」(B)「家族の外面的現存在である所有と、およびこれにたいする配慮」(C)「子どもの教育および家族の解体」という三つの面で、おのれを完結するものとしてとらえたが、このことは、彼が「家

族」を、市民社会的関係との関連で考察していたことを示している。そして、このことはヘーゲルが市民社会における「婚姻」をすでに性的結合という人間の自然的一体化ではなく、特殊な愛着＝一体性において、つまり、そうした自然性を放棄する行動としてとらえ、それを「家族の資産」に象徴される持続した共同のもののための「配慮」と「取得」とをとおして、さらに、子どもの教育において現実化されるものとしてとらえていたことにもつながっている。その際、ヘーゲルは、「子どもの教育」のなかに家族から市民社会への移行の完了をみとめており、家族による教育は、二つの使命、すなわち、家族関係からみての「積極的使命」と「否定的使命」という矛盾した二側面をもつとしている。すなわち、前者は「倫理性を直接的でまだ対立を含まない感情というかたちで子供のなかに作りあげ、子供の心情がこの感情を倫理的生活の根拠として、愛と信頼と従順のうちにその最初の心情的生活を送ってしまうようにするという使命」をさし、後者は、「子供を、その生来の状態である自然的直接性から抜け出させて、独立性と自由な人格性へと高め、こうした子供に家族の自然一体性から出てゆく能力を獲得させるという使命」¹⁾をさしている（傍点筆者）。

1) Hegel, a. a. O., S. 158. ヘーゲル, 前掲書, 402 ページ。

このように、ヘーゲルが家族からの子どもの自立を「家族の倫理的解体」として位置づけたことは、市民社会における集団と個人の「同一化」作用の矛盾を考察する上で、重要な視点を提出している。すなわち、ヘーゲルが、「家族」の性格に典型的にみたように、市民社会においては、子ども・青年が彼らの関係をめぐる「非一体性」へといたるまでにいくつかの段階があり、「同一化」作用の矛盾にも、さまざまな移行の色合いが与えられるということである。

市民社会における共同体からの個人の自立をあらわす、第二の、そしてもっとも中心的な指標は、市民社会の成員である個人（市民）が「特殊的人格」として登場し、相互または全体に対していうことである。ヘーゲルにしたがっていえば、この「特殊的人格」は、どの他の「特殊的人格」と関連する場

合にも、「普遍性の形式」という原理によって媒介されたものとしてのみおのれを貫徹して満足させる¹⁾。その場合、「普遍的形式」とは、市民社会における各人の欲望追求のための経済活動によって結びつけられる社会的関連および、そのなかで働らく経済法則、さらにそれを基盤として、万人に抽象的に妥当する法律として定立された諸権利にほかならない²⁾。

1) Hegel, a. a. O., S. 165. ヘーゲル, 前掲書, 414 ページ。

2) ヘーゲル, 前掲書, 414 ページ, 及び 415 ページ, 訳注(1)を参照。

市民社会における集団及び個人の「同一化」作用は、各人がこのような「特殊的人格」として、すなわち、各々の利己的目的を追求する一個の「私的人格」の、そしてそうした個人が属する集団の「同一化」作用として現象する。その際「私的人格」は、その「私的目的」を追求しようとするれば、当然、他の「私的人格」と相対せざるをえないが、そこでおこる「同一化」作用は、自己の目的を追求するために、他者がその限りにおいて、彼の手段となり、そうした目的—手段の関係が、相互の「私的人格」において「平等」に存在するということを前提としておこなわれる。だから、「同一化」作用は、ある「具体的人格」が他の「具体的人格」を手本として、ある性質をわがものとする作用であるといっても、その際、それぞれの個人が互いに「手段化」しあっている他者の、その限りにおける具体的性質をわがものとするのではない¹⁾。

1) この点で、『法の哲学』の次のことばは重要である。

「特殊化されたもろもろの欲求に対する手段も、また総じてこれらの欲求を満足させる方法も、同じく部分化され多様化され、こうして部分化される多様化された手段と方法は、それらはそれでまた、相対的目的や抽象的欲求となる。——これは無限に進行する多様化であり、そしてこの多様化は、まさにこれと同じ程度において、これらの用途を区別することであり、目的に対する手段の適合性を評価することであって、これがつまり洗練化ということである。」「欲求と手段とは、実在的現存在としては、他人に対する存在となる。欲求と手段の充足は他人の欲求と労働によって制約されており、この制約は自他において相互的であるからである。欲求および手段の一性質となるところの抽象化はまた、諸個人の間の相互的關係の一規定にもなる。承認されているという意味でのこの普遍性が、個別化され抽象化された欲求と手段と満足の方法を、社会的なという意味で具体的な欲求と手段と満足の

方法にするとところの契機なのである。」 Hegel, a. a. O., S. 171, ヘーゲル, 前掲書, 424—5 ページ)

「右の契機はこのようにして, 手段それ自身に対しても, 手段の占有に対してもまた欲求を満足させる仕方方法に対しても, それらの目的を規定する一つの特殊な要因となる。さらにこの契機には, この点において他人と同等でありたいという要求が直接含まれている。こうして一方での, この同等性の欲求と, 自分を他人と同じにすることである模倣とが, 他方でのひとときわ際立ったものによって幅をきかせたいという, 同じく右の契機のうちにある特殊性の欲求と相俟って, これら自身が欲求を多様化し拡大化する現実の源泉となるのである」 (Hegel, a. a. O., S. 171—172, ヘーゲル, 前掲書, 425—6 ページ。)

たとえば, 互いに交換される商品のにない手としてあらわれる「私的人格」の間に働らく「同一化」作用について考えると, 「私的人格」は, それぞれの私的目的を, 異なる商品を獲得し, 異なる欲望を満足することによって追求する。市民社会においては, このような「私的人格」が, もっとも一般的な商品である貨幣をとおして相対し, 私的目的を拡大していくのであるから, 欲望の「同一化」作用は以前とくらべものにならないほど活発になる。だがそのなかで, そこに登場する私的目的の対立もまたあらわにならざるをえない。つまり, 交換される商品はそれぞれ具体的な使用価値をもったものであり, それによって追求される欲望は, その限りで具体的であるから, 「私的人格」はそうした対立する具体的欲望そのものの側面において直接「同一化」作用をおこすのではない。そうではなくて, 「私的人格」の作用は, そのような商品の交換によって互いに他者を手段化している「私的人格」の共通の目的, すなわち, やがては市民社会において, 生産の一環に自己をくみ入れ, それらの商品を貨幣にかえ, 利潤を追求しようとする「抽象的人格」の「抽象的性質」間の作用として, すなわち階級としての市民間^{ブルジョア}の作用としてあらわれるのである。だから, そうした「同一化」作用によって「同一化」される抽象的性質は, たとえば商品交換の契約を「誠実に」実行しようとする「実直」さとか, 「信用」とか, 生産の拡大によって利潤をあげようとする, 「競争心」や「投機心」などの性質としてあらわれるのである。¹⁾

1) ヘーゲル『法の哲学』, 前掲書 379 ページ訳注(4)を参照。

つまり、これらの性質は、まさに、市民社会的関係の「抽象的普遍性」と結びついた性質であり、そのような「抽象的普遍性」こそ、「私的人格」が各人の利己的目的を追求する場合に、各人を結びつける集団的原理＝紐帯となるものである。このように、市民社会における集団及び個人の「同一化」作用はまさに市民社会における経済法則とそれに基づく法律上の諸権利において一般化されるところの、集団及び個人の諸性質における「同一化」作用としてあらわれ、最終的には市民社会的自由を前提とした、そしてその秩序を維持する市民国家における集団及び個人の権利関係における「公的」なものの「同一化」作用としてあらわれるのである。

もちろん、ここで忘れてならないことは、このような市民国家における「同一化」作用が、他方で、集団及び個人の欲望の模倣を一般化し、そのなかで多様化する欲望を量的にも広げていくという傾向である。この傾向は、いうまでもなく、大量に生産される商品が個人及び集団によって交換され、消費されることによって促進されるが、このことは商品の大量生産・消費をとおして集団及び個人（市民）の「模倣的欲望」を急速に増大させる¹⁾。

- 1) 「模倣的欲望」については、ルネ・ジラール『欲望の現象学』古田幸男訳、法政大学出版局、1971年を参照。(René Girard, *Mensonge romantique et vérité romanesque*, 1961) なお、欲望の「模倣性」と「物象化」との関係について論じたものには、織田平和「ルネ・ジラールと文学の社会学の方法」（作用啓一・富永茂樹編『自尊と懷疑—文芸社会学をめざして』筑摩書房、1984年所収）がある。

しかし、市民のあいだでの、このような「模倣的欲望」の「同一性」の拡大は、他方で、欲望の無限の分化と対立する。市民は商品の生産と消費をとおして、新しい欲望を開発し、欲望の模倣を促進するが、個人及び集団の「同一化」作用のあり方が、こうした市民の「模倣的欲望」だけで決定されるのではない。

ここで、市民社会における個人及び集団の共同体からの自立をあらわす指標は第三の新しい内容を獲得する。すなわち、市民国家における「公的」なもの——市民的自由のもとでの個人及び集団の権利・義務関係は、人格の形式的自由と平等としてあらわれながら、その実質においては、そこにつらぬかれる経

済法則——価値から剰余価値への展開——のなかで、人間の諸能力そのものを商品化し、個人をそのにない手として登場させ、市民社会内部に、資本—賃労働という関係を普遍的に生み出すということである。この結果、市民社会の内部に資本のにない手——資本家（階級）と賃労働のにない手——労働者（階級）が分裂し、市民的自由と平等は前者にとっては、賃労働によって剰余労働を取得する自由と平等（資本の価値増殖要求の）として、後者にとっては、労働力を売って生活せざるをえない不自由と不平等として現象する。したがって、市民社会における個人及び集団の「同一化」作用は、ここから新しい矛盾を生みださざるを得ない。すなわち、市民社会における公的な自由・平等の形式と内容のするどい矛盾は、階級として分化した各々の側で、相互に対立する新しい「反発」と「牽引」の作用を、すなわち、互いの結合と競争、そして基本的には両者間のするどい対立・闘争をひきおこす。マルクスが『経済学・哲学草稿』のなかで述べたように、この対立は、市民社会（国民経済学）的關係のなかでの「労働の疎外」、また「人間の類的人間からの疎外」、「自己疎外」、さらには「人間の人間からの疎外」¹⁾ による「同一化」作用のするどい分裂の発生である。

1) K. Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskript*, Reclam. S. 156—159.

マルクス『経済学・哲学草稿』城塚登、田中吉六訳、岩波文庫、93—98ページ。

こうして、市民社会の発展は、欲望の模倣、その平準化と分化のうえに、さらに新しい矛盾を発生させる。欲望の豊かな分化を前提にして、欲望を自由に模倣して我がものとすることができる資本家（階級）と、欲望そのものの分化をいちぢるしく制限され、その制限された欲望を不自由のうちに模倣せざるをえない労働者（階級）とのするどい分裂である。

しかし、この分裂は、一方で、支配階級としての資本家の欲望を「公的」に擁護する市民国家における自由・平等と、被支配階級としての労働者の不自由と不平等を固定化し、拡大再生産すると同時に、そのような形式的な「公的」自由と平等をあらゆる分野で実質化しようとする新しい権利—義務関係の自覚と、国家にたいして、その現実化を要求する運動を引きおこさざるをえない。

そして、このような自由と平等の実質化は、一方で、新しい権利として獲得された性質をつねに普遍化することによって、新しい欲望の模倣の普遍化を引き起こすとともに、そのもとでの個人の欲望や性質の実質的な多様性をも促進せざるをえない。そして、このことが「同一化」作用における新しい矛盾をひき起こす。

しかし、このことは、単純に市民社会的関係そのものを廃棄する方向へ向かうのであろうか。つまり、この運動方向を、市民社会における欲望の「公的」「私的」関係そのものを廃棄し、新しい未来の共同体的関係へ導くこととして、一義的に位置づけることができるのだろうか。このことは未来の「同一化」作用のパースペクティブにかかわる決定的に重要なモメントであるが、私たちは、すでに述べたことから想像できるように、「公的」自由・平等をあらゆる面で実質化する方向を考えてみても、市民社会的関係のもとでは、その現実化過程で、それらが形式化される事態が絶えずおこり、したがって、そのことは、私的生活における「同一化」作用の不平等がつねにもたらされ、そこで反発がおこりうることを予想させる。だから、市民社会における欲望の「公的」「私的」関係における固有の矛盾は、国家における形式的な自由と平等を実質化し、資本一賃労働のような経済的不平等を止揚する必然性をその内部にもちながら、——そしてこのことが政治・経済における社会主義的課題として発生・発展することはいうまでもないが——権利関係そのものが問題となる限りにおいて、つねに「同一化」作用における「反発」の要因を残すことになる。そして、政治的・経済的不平等を市民社会的関係において止揚しようとする運動は、つねに「同一化」作用における新しい矛盾を生みだす。そして、実質的平等と自由の拡大のもとでの「同一化」作用における新しい矛盾の発生は、現状にたいする、さまざまな批判的運動となって現実化する。

さて、以上のようにみてくると、市民社会における個人及び集団の「同一化」作用は三重の矛盾する層をかかえて進行していることが予想される。

第一に、市民社会における自然的一体関係から市民社会的関係への渡り行きに際しての矛盾、すなわち、自然的一体性からの離脱を必然的にもつという矛盾である。第二に、市民社会における「公的」「私的」関係にあらわれる固有

の矛盾、すなわち、「同一化」作用における集団及び個人の性質の普遍化・抽象化（「理念化」にともなう「量化」）とその具体化・個性化との矛盾である。第三に、市民社会的関係における「同一化」の性質の普遍化・抽象化における実質的自由・平等の拡大とそれにとともなう具体的・個性的性質の分化との新しい矛盾である。こうした矛盾の重層化のなかで、さきの「同一化」作用の諸相に新しい内容がつけ加わるのを私たちは見なければならない。¹⁾

- 1) 本稿では資本主義の発展過程——「自由主義的な資本主義」から、「国家的に規制された資本主義」、たとえば、国家独占資本主義・帝国主義の段階にいたる「同一化」作用の諸矛盾の展開については、具体的に分析されていない。したがって、以下の行論でも、分析は、なお市民社会に一般的な矛盾の提示にとどまっている。この点の分析は今後二期したと思う。（なお、「自由主義的な資本主義」、「国家的に規制された資本主義」の表現は例えば、J・ハバーマス『晩期資本主義における正統化の諸問題』細谷貞雄訳、1979年、岩波書店、Jürgen Habermas, Legitimationsprobleme im Spätkapitalismus, 1973を参照。）

(3) 「同一化」作用における「自然的なもの」と「社会的なもの」¹⁾との矛盾

さて、市民社会における「同一化」作用の矛盾を、社会的・歴史的枠組みのなかで、なお、一般的、抽象的に分析してきたが、それらが「同一化」される性質のどのような内容にかかわって構造化されるのか、という点に考察を進めなければならない。というのは、さきに述べたように、「同一化」作用は、集団及び個人の身体的・感情的・認識的・自我（人格）意識的レベルにおいて、しかも、意識的・無意識的關係をふくんで成立するが、その矛盾の諸相における力動性はどのような相互分裂と分極化を、社会的・歴史的につくりだすかという問題が当然問われるからである。

- 1) ここで、「自然的なもの」と「社会的なもの」は一般的な意味で使用されているのではなく、「自然共同体的なもの」と「市民社会的なもの」ということを特殊に意味している。

ここで問題になるのは、個人が自然共同体的関係から自立する過程で、自然

的一体性をどのような内容にそくして、個人及び集団間・内で分極化させていくかということである。

市民社会的関係における「同一化」作用は、すでに述べたように、自然共同体的関係での一体性の喪失のうえに進行するが、それは、身体・感情・認識・自我意識の全体的で未分化な融即・一体化のいったんは喪失、するなわち、その分立・分裂・非一体化としてあらわれる。

このことを子ども・青年の成長過程における「自然的なもの」と「社会的なもの」との矛盾をとおしてみよう。

子どもは家族において多かれ少かれ、愛と信頼と従順という、まわりとの一体化した感情から、義務と責任という、まわりとの非一体した感情へと、はやくも移行させられる。それは自然的直接性から独立性と自由な人格性へと子どもが移行していくうえで、必然的にたどらなければならない道すじである。そこでは、子ども・青年は、身体・感情のレベルでの即自的・自然的一体から、いったんは切り離され、市民社会的関係のもとで、ある役割をはたすことを要求され、自然的欲望をおさえて行動しなければならない。役割意識は、自他の分化と差異の意識をふくんでおり、自我意識の発生なしには不可能である。エディプス・コンプレックスによる、子どもの内的葛藤は、すでに父親・母親と子どもの三角形的関係のもとで、性的な欲望が、父母からの働きかけによって抑制され、「超自我」の形成がはじまったことを示している。そこでは、父親と母親との間にあって、自己の役割を直観しつつある子どもの自我意識の葛藤をすでにみることができる。そして、このような社会的役割の定立は、子どもに義務と責任のもっとも原初的な感情としての罪責感を生みだす。もちろんこの罪責感は、必ずしも市民社会に固有のものではないが、市民社会的関係のなかでは、市民社会的義務の感覚へと発展していく必然性をもつ。すなわち、子どもの罪責感の発見は、フロイトのいうように、多くは無意識のうちにおこるが、それは、イドにたいして、批判的懲罰的審級としての超自我が対立してくることを示すものであり、この最初の道徳感情の発生において、子どもはすでに自然の性質を、まわりと一体化する欲動と、まわりと対立しつつ同調していく自我意識とに分裂させざるをえない。「同一化」作用は、ここではすで

に、自然欲動と道德感情という二つの性質間の矛盾としてあらわれており、子どもはこれらの性質の比較のうえに、それぞれ異った「同一化」作用をまわりをたいしておこなうのである。

ところで、このような「同一化」作用の展開は、自我意識の発生をすでに前提としているが、そこには、市民社会的関係のもとで、人びとが経験しなければならない「不幸な意識」（ヘーゲル）の原型がみられる。子どもはすでに自然的欲動の世界とその身体的・感情的一体からの喪失感を必然的に感じざるをえないのであり、それは、人間が自然的状態から、市民社会における法的状態へと旅立つ途上で必然的に味わわなければならない意識である。子どもが市民社会のある道德律にしたがって行動するということは、他者の欲求と自己の欲求とを相互に関係させ、普遍的な欲求——一般的意志に自己の行動を従わせるということである。そして、社会的関係のなかで、ある役割をになうということとは、自己をこの一般的意志にしたがって制限させながら、自己の欲求を發展させるということにほかならない。それは、他者にたいするそれまでの身体的・感情的一体化を分裂させ、一般的意志を道德的規範としてみとめながら、他者と自己の欲求を客観的なものとして認識し、それを比較・考量しながら、行動することを意味する。このことは、他者との身体的・感情的一体化の即自的満足から自己をつねに切断していくこと、そうした世界のなかに自己を投げ入れ、自己と他者との対立を一般的意志に示される一般的原理によって乗り越え、そうした対自的自己を自己のなかにつねに意識せざるをえないという矛盾をつねに自己に荷すことである。身体・感情と認識との対立・矛盾は、このような自己と他者との新しい対立によって引き起こされるので、これこそが、市民社会的道德のなかに子どもが投げ入れられることの認識論的意味である。すなわち、子どもは、市民社会的関係のなかで、一定の役割をにないながら、この役割をかつての自然的一体性への衝動と対立させ、自己を二重化する。その時、子どもが荷なう役割の意識は、他者の欲望との比較・考量のうえに成り立つ新しい質の欲望の発生、そして、身体・感情と認識の分立・分裂の意識である。子どもは、市民社会的関係のなかで、このような新しい欲望を生みだすことを通じて、他者の欲望を媒介しながら、その欲望の動機、対象、手段

などの認識を、身体・感情の一体化のなかから分立させ、他者と対自的にむきあい、世界に対象的に働らきかけていく。その場合、自己の二重化とは、身体・感情の一体性に止まろうとする自己とそれを脱しそれと対立する新しい欲望をになう自己との二重化である。ヘーゲルが「家族の倫理的解体」と呼んだのも、子どもがこのような、市民社会における対象的世界へ対自的に入りながら、自己の二重化を経験していくことを意味したのであり、ヘーゲルは、これを可能にするものを、人間の自然的純粋性を克服する「陶冶としての教養」¹⁾ (Bildung) と呼んだのであった。それは「より高い解放のための労働」、すなわち、「動作のたんなる主観性や欲望の直接性だけではなく、感情の主観的な自惚れや個人的意向の気まぐれをも克服しようとする厳しい労働」²⁾ を意味していたが、くりかえし述べてきたことからわかるように、それは、身体的・感情的一体化を可能とした、かつての自然的自己との闘争、新しい自己とかつての自己とのするどい対立、前者による後者の克服、両者の和解などをともないながらの複雑な過程である。

1) Hegel, a. a. O., S, 159, ヘーゲル『法の哲学』, 前掲書, 421 ページ。

2) a. a. O., S, 169, 同上, 420 ページ。

ところで、このような対立は、実際には、子どもが市民社会的関係のなかで経験する系統的な「学習」をとおして開始されるのであり、「学習」という「厳粛な行為」(Ernst des lernens)こそ、ヘーゲルが「幼児」(Kind)をまさに、「少年」(Knabe)たらしめると述べたものである¹⁾。少年の関心ははじめはまだ「遊戯」と「学習」との間に分裂しているが、次第に学校での系統的な「学習」をとおして市民社会的関係へと移行していく。だから、ヘーゲルがいうように、「学校は家庭からの市民社会への移行を形成する」のである²⁾。

1) Hegel, Encyklopädie der philosophischen Wissenschaften Werke. 10, S.

80—81. ヘーゲル『精神哲学』(上)船山信一訳, 岩波文庫, 1965年, 128—9 ページ。

2) Hegel. a. a. O., S, 82—83 ヘーゲル, 前掲書, 132 ページ。

しかし、ヘーゲルにとって、子どもの市民社会への移行は単純ではない。そ

れは、少年期から青年期への移行において「青年」(Jüngling)のなかに、多かれ少かれ主観的な形態をもった一般者としての理想と、市民社会における個別性との対立をつくりだす。しかし理想をもって個別性を取り扱うことは、大きな苦痛をふくんでおり、時には青年をヒポコンデリーにおとし入れる¹⁾。

1) Hegel, a. a. O., S. 83—84. ヘーゲル, 前掲書, 132—4 ページ。

自然一体的関係から市民社会的関係への移行は、ヘーゲルにおいてするどい矛盾をとまなう、尋常でないものとして考えられているのである。

ところで、このことは、はやくから子どもの意識のなかに、ロマン主義的傾向と現実主義的傾向との分裂が発生することを予想させる。それは、ヘーゲルが市民社会における「不幸な意識」とならんで問題にした「美しい魂」(die schöne Seele)の発生による、子ども・青年の内面における両者のするどい対立である。「美しい魂」とは、一口で言えば、「自然の自発的傾向性」と「義務の厳格な考え方」を「自分の感情の美しさ」によって「和解」させようとする主体の状態のことであるが²⁾、それはカントの道德主義をシラーが「美的教育」で乗り越えようとしたことに典型的に示されるように、「自然」と「道德性」との「和解」である³⁾。それは「魂^{ゼーレ}」ということばがあらわしているように、身体性と認識性とを媒介させる肉体をもった精神、つまりは、肉体と精神との融合状態である。それは、失われた「一体性」をとりもどそうとする「憧憬」としてあらわれるが、なによりも「行為的」であるよりは、「観想的」であろうとする傾向をもつ³⁾。「美しい魂」は「行為する良心」とは対照的に、普遍性にまで高められた主体の主観性をあらわしている⁴⁾。

1) Jean Hyppolite, *Genèse et structure de la phénoménologie de l'esprit de Hegel*, Aubier, Éditions Montaigne, 1946. p. 496. イポリット『ヘーゲル精神現象学の生成と構造』下巻, 市倉宏裕訳, 岩波書店, 1973年, 277 ページ。

2) Op. cit., p. 496. 同上, 277 ページ。

3) Op. cit., pp. 496—7. 同上, 277—9 ページ。

4) Op. cit., p. 498. 同上, 280 ページ。

これが、「美しい魂」が「不幸な意識」のいわば裏がえしの意識として、そ

れと対照的に市民社会に生まれてくる必然性である。すなわち、「不幸な意識」が自己を市民社会的関係へと外にむかわせるときにあらわれるのに対して、「美しい魂」は、「自己を自己の心胸^{むね}の内部へとむかう」ときにあらわれるのである。「美しい魂」がいただく「憧憬」は、みずからの対象をもつが、それは自己の喪失のうえにある対象である。そして、それはつねに、自己を消えうせるようにしか対象化しえない魂である。「……美しい魂と呼ばれるひとつの不幸な魂の光輝は内面において次第に消え失せて動き、そしてこの魂は空中に失せる形のさだかでない霧のようになって消えさるのである。」¹⁾

1) Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, Felix Meiner Verlag, S. 463. ヘーゲル『精神現象学』下, 金子武蔵訳, 岩波書店, 1979年, 981 ページ。

だから、この意味で、「憧憬」はつねにノスタルジーである。子ども・青年は自然的一体性から分離していく過程で、つねにこのような還るべき「故郷」を求めようとするのであり、それは、母親から、それに代るべきもの——「母なるもの」としての象徴へ移っていく。子ども・青年は「一体化」すべき対象を現実にもつ場合には、つねにそれにもどっていくことができるが、その対象が現実に失われる場合には、幻想的にそれを求めざるをえない。すなわち、市民社会的関係がまだ多くの共同体的関係をまとい、それと共存している場合には、子ども・青年の「同一化」作用は、ある意味でロマンチズムとリアリズムとを調和させることができる。例えば、共同体的仲間集団は、すでにひとつの市民社会的関係へ移行する面——一定の掟をもっており、子ども・青年はその一般的原理にしたがわなければならないが、同時にそのなかで、子ども・青年どうしは、感情の面で「同一化」できる自然的一体性を保っている。そして、この自然的一体性のなかで、自然性と道徳性とは調和を保つことができる。たとえば、「家族ごっこ」のなかで、子どもが家族からはなれながら、家族でのいわば一体性にもどることができるように。それは、ちょうど十八世紀の「自然概念」がまだ、「自然」と「道徳」との交叉点に位置づいていたことを思わせる。子ども・青年は、すでに私的欲望を追求しながらも、なおそうした欲望をつくりだす「普遍的人間」、いわば「自然法則としての人間」の存

在を無意識のうちに、彼等の集団のなかに感じとっているかのようなものである¹⁾。だから、そこにはすでに個性へのめざめが、身体・感情と認識の分立をとおしてはじまっているが、まだそれはそれほど決定的になってはいない。

- 1) ジンメル『社会学の根本問題』清水義太郎 訳，岩波文庫，1979年，106—7 ページ。(Georg Simmel, Grundfragen der Soziologie Individuum und Gesellschaft, 1917)

子ども・青年の「同一化」作用におけるロマンチズムとリアリズムの対立の程度は、彼ら自身が、還るべき自然的一体性および現実におけるその喪失の程度と比例している。彼らの属する集団が、自然的一体性を失い、彼らの私的欲望の「せめぎあい」を、外的ルールで抑制しなければならなくなればなるほど、その対立の程度は強くなり、子ども・青年の自然的一体性を求める願望は幻想性を帯びざるをえない。ロマンチズムの自立に象徴される、いわゆる「夢みる子ども・青年」の登場である。「夢みる感情」は、かつては彼らが属した自然一体性の喪失感の強さと重なって、ナイーヴな子ども・青年の内面を強くとらえる感情である。それは、道德の世界にたいする心情の世界のするどい対立であり、すでに十八世紀においてルソーのロマンチズムのなかに天才的に感じとることのできる世界である。後に十九世紀のロマンチズムは、このような「夢みる子ども・青年」の原型をうけついで発展させた。それは、十九世紀市民社会における私的欲望の「せめぎあい」，その矛盾・対立の激化がつくりだした反近代的理想主義の一典型であった。「美しい魂」における身体と感情・認識の融合，その「同一化」作用における「個性」の主張は、いわば「量的」個人主義としての十八世紀個人主義にたいする「質的」個人主義としての、その転回点を示すものであった¹⁾。

- 1) ジンメル，前掲書，126 ページ。なおこの点については，作田啓一『個人主義の運命近代小説と社会学』岩波新書，1981年，第2章「個人主義思想の流れ」とりわけ，101—108ページを参照。

「夢みる子ども・青年」は，こうして，彼ら自身が周囲にたいして「個性」

を主張しようとするほど、孤独の状態におかれる。「夢みる子ども・青年」は、周囲との比較・考量を拒否して、自己独自の内面へと向かう。それは、自己の「個性」が身体と感情の融合の独自の美的状態のなかにしかないという意識をともなっている。それはルソーが述べた「自己愛」(l'amour de soi)の感情の線上に位置づいている。ルソーの「自己愛」は「利己愛」(又は「自尊心」)(l'amour propre)が市民社会における競争、欲望の「せめぎあい」のなかで、他者との比較をとおして感じとる虚栄心、羨望の念、憎悪心などを拒否するところに成り立つ。だから、それは、そのような市民社会的関係のなかから、自己を切りはなして自然と一体化する心の状態、ルソーのいう本来の人間的自然感情としてまずは表現される。それは、市民社会的関係における競争からとりのこされる弱者の状態、その苦しみを本能的に感じとることのできる「夢みる子ども・青年」の悲しみとメランコリーの状態であり、それは、弱きものへの「憐憫」(pitié)の感覚とかさなっている。

「夢みる子ども・青年」における身体・感情の一体性は、だから、みたところ、市民社会的関係における現実的な感情からの、より自然的な感情の分離の状態——「自己愛」と「利己愛」の感情が分裂する以前の状態を純粹に保とうとするものであり、「利己愛」の感情にたいする「自己愛」の感情の闘いとして表現されるものである。

だから、「夢みる感情」の発生は、「現実的な感情」の発生と対立をなしている。子ども・青年は、現実の場面では、市民社会的関係をとおして、他者と結びあい、相手の欲望を自己のそれと量的に比較し、その質が、価値同一性をもつことを認識し、お互いがこの価値同一性を競いあっていることを意識する。だから、この世界では、「同一化」作用における強い牽引と反発は法則的である。あらゆる社会的感情は羨望の念や増悪心がそうであるように、勝負にかかわる牽引と反発のかけ引きのなかで発達する。それは、しばしば衝動性を帯びざるをえないが、しかしその底には、相手の欲望と性質の冷ややかな計算・計量を蔵していることを見逃すべきではない。たとえば、子どもの「利己主義」にみられる、あるしたたかさは、多かれ少かれ、他者にたいする比較・考量の意識と重なっている。これに対して、子どもは、夢みる場面では、そのような

利己的欲望の衝突関係から自己を遠ざけ、「個性」そのものをその対象と「一体化」させようとする。そして、そうした対象を現実に見出せない場合には、子どもはロマンチックな物語や演劇の主人公や音楽のリズムと「一体化」しようとする。そして一時的に現実の場面で傷ついた魂をいやし、自己を慰める。だから、子ども・青年の「夢みる感情」には、多かれ少かれ、自然的情動への「退行」欲求がかくされている。

市民社会的関係における、子ども・青年のロマン主義的傾向と現実主義的傾向との対立は、こうして、彼らの感情における「自然的なもの」と「社会的なもの」との分裂を深く表現している。

それは、さきに述べた市民社会的関係における「同一化」作用の矛盾の重層化とその展開のなかでは、その力動性に無限に多彩な色合いとアンビバレンツを与えるのである。

まず、「同一化」する性質の「自然的なもの」と「社会的なもの」との矛盾・対立は、一方で、子どもの感情をさまざまな民族的色合いをともなった神話と民話のメルヘン的世界へとさそうかたちで具体化される。そこでは、子ども・青年の自然的感情は他者との無意識的な融合の世界——市民社会的関係がおおってしまっている無意識の「古層」へと接続しながら、他方で、市民社会的関係における感情の対立を民族的な愛国心の高場へと転化させる。メルヘンの世界はその意味で「夢みる子ども・青年」のロマンチズムを現実の市民社会的感情の民族的統一の現実主義へとつなごうとする。

しかし、民族的な愛国心の統一のなかに、子ども・青年が単純に「同一化」していくのではない。なぜなら、市民社会的関係における階級対立は、民族的愛国心の統一世界の虚偽性をつねにあらわしていくからであり、子ども・青年の自然的感情は、社会のしいたげられた、なやめる弱き人びと——民衆へと「同一化」していくことによって新しい内容を獲得する。メルヘンの世界における、子ども・青年のルサンチマンやピティエの「昇華」は、多かれ少かれ、アンデルセンの童話の主題に示されているように、十九世紀ヨーロッパにおける子ども・青年の市民的感情におけるアンビバレンツとその融合の質を示している。そこでは「同一化」作用における「自然的なもの」と「社会的なもの」の

統一の力動性の一つの典型が見られる。

このようなメルヘン的世界にたいして、両者の統一がより現実的な形をとるのは、子ども・青年が入りこむ市民社会的関係における民衆的モラルに、子ども・青年の身体・感情が「同一化」していく方向である。それは、民衆の多様な労働のなかに、そのような人間的紐帯の変わらぬ姿を発見することによって、市民社会における大人世界の欲望の「せめぎあい」の汚辱のなかから、子ども・青年が自己の性質を「同一化」していく真実を発見していくリアリズムとしてあらわれる。例えばそのような少年の姿を私たちは、デ・アミーチスの『クオレ』の主人公のなかに見出すことができる¹⁾。しかし、この現実主義のなかには、多かれ少かれ、十九世紀ヨーロッパの労働運動の発展がつくりだすことになる、労働者の新しい共同・連帯性、そして、例えば、ロシアのそれに典型的にみられるように、深いところで、ゴリキーの自己形成に決定的な役割をはたした祖母の形象²⁾にみられるような、あの古代・中世以来の民衆の生活の原始生産的共同性の——各地域でその特殊なあらわれを見せる——古層へと子ども・青年が「同一化」していく傾向が、重なっているように思われる。だから、ここでも、子ども・青年の「同一化」作用における「自然的なもの」は「社会的なもの」へと一義的に具体化されていくのではない。それは身体・感情の原始的部分をつねに民衆のなかに保持されてきた原始共同体的古層へと重ねあわせる傾向をもっているのである。

1) 安藤美紀夫『世界児童文学ノート I 十九世紀的世界』偕成社、1975年、93—107ページ参照。

2) ゴリキー『幼年時代』『世の中へ出て』(上)(下)湯浅芳子訳、岩波文庫、1968年、1971年、1972年。なお、E. H. エリクソン『幼児期と社会』仁科弥生訳、みすず書房、1980年のなかの第10章「マキシム・ゴリキーの青年時代の伝説」(E. H. Erikson, *Childhood and Society*, 1950, 1963)を参照。

子ども・青年の「同一化」作用における「自然的なもの」の保持は、しかし、彼等の欲望の「せめぎあい」のなかで、つねに民衆的感情の古層へと還っていくような形で具体化されるのではない。それは、彼らが、市民社会的関係をとおして、苦悩の生活を強いられるなかで、「道化」や「悪童」の役を演

じつつ、大人社会の因習や虚偽に「同一化」することを拒否し、また度重なる冒険や反抗をとおして、彼らの「自然的性質」を保持しようとする姿としてもあらわれる。例えば、コロディの『ピノキオ』やマークトウエンの『トム・ソーヤの冒険』『ハックルベリー・フィンの冒険』の形象には、その一端が明らかにみてとれる¹⁾。

1) 安藤美紀夫, 前掲書, 126—143 ページ参照。

もちろん、冒険や反抗は、つねに市民社会における抵抗に出合うために、限界性を持ち、したがって、しばしば空想的な姿をとらざるをえない。しかし、大人の世界の虚偽と虚栄にたいして彼らが行う拒否は、それへの順応を一方で見せながら、彼らの心の中に純粋な自然的身体・感情をかたく保持しようとする。それは、例えば、ルナールの『にんじん』の主人公にみられるように、実にあざやかな形象を見せる。ルナールは十九世紀における子どもの発見者の一人といわれるヴィクトル・ユゴーが、子どものなかに「天使の姿」を見たのにたいして、子どものなかに「凶暴な極悪な姿」を見た。そうしなければ子どもの文学を革新することはできないと彼は述べたのであったが、彼は、そのなかに、おそらく市民社会的関係における子どもの自然性保持の一つの極限を見つめようとしたのに違いない¹⁾。

1) ルナール『日記』より、なお、安藤美紀夫『世界文学ノートⅠ——十九世紀的世界』偕成社, 1975年, 143 ページより引用。

ルナールは、大人の世界で、「悪者」としてしか生きていけない子どものなかの「弱者」に同情を注いでいる。だがそこには、十九世紀的ロマン主義によく見られる、あのセンチメンタリズムは見られない。

以上みてきた少数の例は、いずれも、子ども・青年の「同一化」作用における「自然的なもの」と「社会的なもの」との対立・矛盾が、対極の間をゆれ動きながら、市民社会における共同体からの自立の諸相をつくり上げてきたことを示している。だが、あらためて確認せねばならないのは、「同一化」作用が「自然的なもの」の極において「個性」を示し、「社会的なもの」の極におい

て、「没個性」を示すといえは、あまりに非現実的に過ぎるということだろう。

市民社会的関係における「同一化」作用は、「自然的なもの」と「社会的なもの」との分裂を深めつつ、両極でのそのあらわれを、いずれも「没個性化」する傾向をもつ。しかし、同時に、それは、両者の統一の質の多彩な色合いのなかに、新しい「個性」の自立の可能性を秘めている。市民社会的関係のなかで、やがて一個の労働力と化さざるをえない民衆の子ども・青年の肉体的・精神的諸性質は、「自然的なもの」も「社会的なもの」も、やがて、おしなべて「画一化」させられる傾向をもつ。民衆は、資本主義社会のなかで、いずれはその感情と認識とを、抽象的な価値還元性をもった画一的なものへと「同一化」させられる運命にある。そのことは、子ども・青年が成長の途上で、当然通過しなければならない現実である。しかし、市民社会的関係のなかで無限にひろがらざるをえない民衆の労働の性質が生みだす、新しい人間的紐帯のなかで、「自然的なもの」と「社会的なもの」との新しい矛盾とその統一の方向もまた発生するのである。つまり、子ども・青年は、新しい「個性」にやがてつながる「同一化」作用の新しい矛盾のなかに旅立たざるをえないのである。だが、この考察はすでに本節のわくをはみ出ている。それは、現代における「同一化」作用の危機の深化のなかであらためて論じなければならないテーマである。

(4) 「同一化」作用の手段としての「しるし」の諸相

さて、「同一化」作用は、集団及び個人の性質の「手本」^{モデル}を介しておこなわれるが、この「手本」は、身体・感情・認識・自己（人格）意識の外的な「しるし」（figure）をとおしてまずあらわれる。いかなる性質も、この「しるし」をとおさなければ表現されないし、互いに対立されない。「しるし」は文字どおり「かたち」であり、「同一化」はこの「かたち」をとおして、「手本化」^{モデリン}される。ところで、市民社会的関係における「同一化」作用の矛盾は、「しるし」にどのような様相を与えるのだろうか。

自然的共同体の「同一化」作用において、成長は互いに、共通の「結合的な心もち」（Gesinnung）を通い合わせる。これは、普通「了解」（Verständnis、

consensus) と呼ばれる作用である。それは「人間を一つの全体の部分として結合する特殊な社会的力であり、社会的共感」である¹⁾。自然的共同体では、「共感」は、市民社会的関係における全体から「独立」した個人間の「共感」と違って、テンニエスがいうように、全体と結合している「社会的共感」としてあらわれる。

- 1) テンニエス『ゲイマインシャフトとゲゼルシャフト——純粹社会学の基本概念』上、杉之原寿一訳、岩波文庫、1958年、58—9 ページ。(F. Tönnies, *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie*, 1887.)

「了解」は、自然的共同体の成員が相互に他者への直接的な関与と、共に喜び、共に悲しむという傾向によって規定され、互いについてのくわしい直接的知識にもとづいて行われるから²⁾、その手段もまた、表情や身振り、音声及びそれらと直接結びついたことばである。だから、「了解」の手段の中心にことばが位置づいているといっても、それは、あらゆる感情や情緒の具体的表現としてのそれである。

- 1) テンニエス、前掲者、上、59ページ。

だから、自然的共同体における「同一化」作用の「しるし」は、その成員が共同体との「一体性」において保持している様ざまな表情、身振り、音声、そしてそれらと直接結びついたことばである。ことばが結びついているから、それらの手段はもちろん、成員の全体的な思惟をふくむ意志の表現手段ではあるが、市民社会的関係におけるそれのように自立化した思惟と結びついた意志の表現手段ではない。テンニエスは、ゲマインシャフトに固有の実在的・自然的意志を、「思惟を含むところの意志」として、「本質意志」と呼び、ゲゼルシャフトに固有の観念的・人為的意志である「意志を含むところの思惟」としての「選択意志」と対置させた³⁾。こうして、自然的共同体での「同一化」作用の手段は、なによりも共同体全体の意志を直接あらわす「しるし」から成り立っており、思惟は、それにつねに従属するものとして、この意志のなかに内在化されている。

1) テンニエス, 前掲書, 上, 164—5 ページ。

両者の違いは「しるし」における意志と思惟の量的関係のそれではない。両者の違いを決定づけるものは、「しるし」にあらわされる思惟が自立しているかどうかということである。

市民社会的関係においては、すでにのべたように、「私的人格」は、普遍的なものによって互いに媒介されているが、この普遍的なものは、抽象化された概念=ことばで置きかえられる。普遍的なものは、もっとも原初的な形態においては、まずは価値同一性に貫ぬかれた商品によって媒介された人間関係において表現される。そしてそれは—そう発展した姿においては、そうした商品関係によって展開される資本—賃労働を中心とした社会関係の自立化とその概念化によって表現される。「私的人格」を媒介する経済法則（価値から剰余価値への展開）と万人へ抽象的に妥当する市民的諸権利は、もともと市民社会的関係の基礎によこたわる商品によって媒介された基本的人間関係とその発展、法によるその普遍化の表現にはかならない。だから、市民社会的関係においては、あらゆる関係が、抽象的・普遍的なものとして、またそのような内容をもったことばを介して表現されるのである。

そしてこのことが、市民社会的関係における「同一化」作用の諸手段に対して、自然的共同体におけるそれとは決定的に異なる様相を与えることになる。すなわち、市民社会的関係においては、あらゆる表現、身振り、音声、抽象性と普遍性をもつような内容を付与され、その具体的な表現自身が一般化・普遍化・抽象化される。と同時にそれらの諸手段から、抽象的な概念を表現することばが分離され、あらゆる表現手段を抽象的なことばに従属させながら、後者を自立化させていく傾向をもつ。

その際、「同一化」される「手本」^{モデル}は、そうした普遍性・抽象性につらぬかれたものとして、身体とことばに表現されるので、あらゆる表現手段は、その限りにおいて「合理性」につらぬかれるように見える。

ところで、さきに自然的一体化の関係から市民社会的関係への移行は、主として学校での学習という「厳粛な行為」（ヘーゲル）をとおしておこなわれる

と述べたが、このような「しるし」の「合理性」はどのような面において現実化されるのだろうか。

それは、なによりも、近代学校が、それ以前の徒弟制度における手わざと魂の伝達方式に代って、ものごとの概念と法則をことばを中心とした手段によって子ども・青年に「わかち伝える」教授法を生みだしたことに象徴されるように、「計量化」された知識・技能の一定の系列とその伝達を可能にしたところにある。そして、このような教授法の発見は、自然共同体的関係において一体化を保持していた従来の「しるし」の様相を一変させた。

テンニエスは、さきの書物でゲゼルシャフトにおける「選択意志」の諸形態をまず、(1)「考量」(Bedacht) (2)「任意」(Belieben) (3)「概念」(Begriff) の三つの単純形態に区別し、それを示したが、このことは「しるし」の様相の変化の特質を本質的に説明している。すなわち、テンニエスのいう「考量」とは、欲求における快と不快の比較を、目的と手段との客観的な関係のなかにおくことによって、それらを相対化し、互いに分離された目的と手段を結びつけて、認識のうえに快・不快など一切の(感情的)性質を、純粹に量の差異へと変化させることを指している。また、「任意」とは、あらゆる目的が、ある確固たる目的を追求する自我のなかで位置づけられ、自我はその目的にしたがって自己に属する可能性のうち、本質的・無記中性的なものだけを意のままに処理し、思念された結果を生ぜしめるに必要と思われるだけの量の可能性をその時に実現することを指している。さらに、「概念」とは、実在する物や事態を比較したり、比較するのに適するよう表わしたりするために用いる「単位」をとおして自己の欲求達成にとっての「価値」を判断することを指している¹⁾。こうして、テンニエスのいう選択意志の複合形式とは、市民社会のなかの行動における「意図、目的・手段の体系」のことであるが、それは、あくまでも、市民社会における一般的幸福と享樂——私的人格の利益の追求につながる意志の計量化・一般化をさしており、あらゆる「しるし」のこのような体系における従属化の性質をふくんで成立しているものである²⁾。

1) テンニエス、前掲書、上、198—202 ページ。

2) 同上、198—212 ページ。

そして、近代学校における知識・技能の計量化もその例外ではない。そこでは、概念化されたことばが、文化の「わかち伝え」を可能にするその計量化によって、身振り、表情、音声などと分離されるだけでなく、前者もまた計量化される傾向をもつ。そしてそのことが学校における生徒の「同一化」作用にするとい矛盾を生みだす。そこでは、「同一化」作用は「しるし」の一般化・抽象化によって、部分的に「同一化」の様相をますます強めるだけでなく、「しるし」の獲得における欲望の「せめぎあい」をつくりだす。そしてそのことが、「同一化」作用の分裂をつねに緩和するための「しるし」の非合理的作用を同時に生みだす。

近代学校において、知識・技能のための教科に次第につけ加えられていく芸術教科の「しるし」の作用には、市民社会的関係においてあらわになる矛盾を克服しようとする、ロマン主義的・非合理的要素がつねにつきまとっているが、そのなかには、子ども・青年の美的感覚を国家主義的「同一化」へとさそう傾向とならんで、多かれ少かれ、それらに抵抗して、子ども・青年の「人間的解放」と個性の開花を標ぼうする芸術運動の影響を受けとる要素も発生する¹⁾。

- 1) この点については、もう少し展開しなければならないが、さしあたってはこの指摘にのみ止める。

だが、「同一化」作用における「しるし」は、市民社会的関係の矛盾の深化のなかで、次のような基本的矛盾を刻印するようになる。

第一に、市民社会的関係の発展のなかでは、あらゆる関係が、商品形態と、その展開である、資本—賃労働を基盤とした「物化」—「物象化」の形態をとるということ、したがって、「同一化」される性質の「しるし」である、表情、身振り、音声及びそれらと結びついたことばもまた「物化」—「物象化」されざるをえないということである。「物化」—「物象化」は、市民社会的関係において、資本—賃労働という関係が「自立化」し、それがものにおいて、（例えば、地代、利子、利潤において）現象することであり、市民社会的関係のなかに存在するものが本来の自然的存在の外被性のなかに、市民社会的関係

の矛盾そのものを内在化させているということであり、しかも、そのような社会的関係をあたかも自然的存在そのものであるかのように「見せかけ」ていることである¹⁾。

- 1) 真田哲也「マルクス経済学批判の方法的前提について」『一橋論叢』第2号、1984年、参照。

ところで、市民社会的関係における、「同一化」作用において、わがものとされる性質は、なによりもまず、このようなものに媒介されているだけでなく、わがものとされる性質そのものが、このようなものに転化されるという法則につらぬかれている。それは、市民社会的関係の展開のなかで、あらゆる物質が「物化」—「物象化」された社会関係のなかにひき入れられるだけでなく、人間の肉体的・精神的性質が、商品化される程度にしたがって、人間そのものが、この「物化」—「物象化」された関係のなかに引き入れられることとしてあらわれる。

したがって、市民社会的関係においては、あらゆる「しるし」が、自然的存在のように具体的な感覚形態をともなっていてあらわれているにもかかわらず、そのなかに、「物化」—「物象化」された関係を「内在化」させており、その外被の奥に抽象化・普遍化された姿をかくしている。だから、市民社会的関係の発展のなかでは、あらゆる「しるし」が、具体的感覚形態と「物化」—「物象化」形態の二重性をはらむようにうながされており、この二重化が、「しるし」の固有の矛盾を展開せざるをえないようにうながされている。その展開は、さきに述べたような矛盾——「しるし」自身を一般化し、抽象化し、そのなかから概念・ことばを自立化させ、その他の諸手段をそれが抑圧するように働らく——をさらに促進する。ところで、「しるし」の「物化」—「物象化」はふつう考えられているように、概念・ことばを自立させ、あらゆる「しるし」を抽象化、一般化させてその具体性を剝奪するように単純に働らくのではない。

「しるし」の「物化」—「物象化」はあらゆる「しるし」の具体的な姿のなかに貫徹するのである。つまり、それは、あらゆる「しるし」を具体的な姿そのままに、かつ具体的な姿の無限の「分化」と「差異化」のうちに、市民社会的

関係の目的——すなわち「私的利益」達成の「手段」たらしめるのである。それは、価値増殖のための「手段」となる限りにおいて、あらゆる「しるし」の具体化とその無限の「分化」と「差異化」をうながす。ところで、このような手段化された限りでの「しるし」の「差異化」は一見「個性化」を促進するように見えるが、この「個性化」は、その目的を達成するために、個人のまわりに、できる限り多数の人間を「同一化」させるように作用し、その結果、「個性化」そのものを「類型化」・「画一化」のもとでの「差異化」たらしめるように働らく。それは同時に、そのような「同一化」のための競争が、新しい「差異化」を他方でつねにつくりだすことによって、当の個人にとってのライバルを生みだす。そこには、「個性化」がつねに「同一化」される数量によって測定されるという、あの市民社会固有の法則が働らくので、類型化され、画一化された「個性」（これは形容矛盾だ！）は、類型化され画一化された多数の個人からの離反という危険をつねにとまなうこととなる。しかも、この危険性は、競争による「差異化」—「個性化」—「類型化」—「画一化」のテンポがはやまればはやまるほど、——市民社会的関係での競争はつねにそのような法則性をもつ——「同一化」作用は極度の不安定のなかに投げこまれる。そして、この不安定性が、一見「自発性」と「内発性」とをもっているように見える「同一化」作用から、実は、自発性と内発性をうばい、それらを外発性と他発性のもとにおくことになる。

そして、以上のことが、「同一化」作用における「しるし」の役割の「転倒」へと導く。

元来、「同一化」作用は、そのもっとも自然的な形態においては、新生児の愛着行動に典型的に示されるように、人間が類的にもって生まれた本来的な「欠如態」を社会的に克服する姿としてあらわれ、「同一化」作用の手段としてのあらゆる「しるし」は愛着行動による「一体化」とそこからの「分化」——新生児がまわりのものや人に働らきかけ、自由を獲得していくための手段としてやがて働らく。ところが、「しるし」の「物化」—「物象化」は、その形態を無限に「差異化」することを一方で促進しながら、その本来の人間的意味を「みせかけ」のものとしてしまう。という意味は、そうした「みせかけ」

のもとでの「しるし」の「差異化」は「同一化」作用を一方で豊かにしながら、他方で「同一化」作用を破壊し、「同一化」作用を互いに敵対する人間間の反発作用に転化するモメントをもつということである。その際、「しるし」の「差異化」は、人間を結び合わせるように働らくのではなく、人間を離反させ、それを、個人の没落への危険をはらんで現実化させてしまう。だから、「しるし」の「物化」—「物象化」された形態のもとでの「差異化」——「個性化」—「類型化」—「画一化」がつねにそれと結びついている——は、個人をたえまない競争とそのかけひきの苦悩のなかに引きこむ。すなわち、「同一化」作用は、彼の「差異」において、多数の人間を「同一化」する場合には、喜びであるが、その喜びは一時的なものでしかなく、それはつねに苦悩へと転化させられるのである。

ところで、このような「しるし」の「物化」—「物象化」の傾向は、「同一化」作用における第二の基本的矛盾へと導いていく。

それは、「同一化」作用の「物化」—「物象化」傾向が表情、身振り、音声などへの概念・ことばの抑圧を強めるだけでなく、すでに述べたように、身体・感情と直接結びついた「しるし」の「差異化」—「個性化」—「画一化」—「類型化」のもとでのその不安定性が、「しるし」の概念・ことばへの従属からの切断を促進し、新しい矛盾のもとでの身体的・感情的不安定を極端に露呈させるということである。それは市民社会的関係の成立初期にみられた概念・ことばと身体・感情の分離を、前者の後者にたいする抑圧の「緩和」としての、両者の和解、そしてそれをとおしての身体的・感情的表現としての、表情、身振り、音声のロマン主義的復活ということとは違った「症候」¹⁾としての身体・感情的表現の露呈をもたらす。

1) ここで、「症候」というのは、symptom (英) symptôme (仏) を指す。ところで、「症候」の類似語に「徴候」があるが、これは、symptom (又は symptôme) の意味のほかに、一般に sign という意味をふくんでいる。ここでは、市民社会的関係の矛盾の激化のもとで、「物化」—「物象化」された「しるし」のなかからその矛盾が、ある sign としてあらわれることをさすから、一般に「徴候」ということばを使った方が適切かも知れない。しかし次にのべるようにフロイトは無意識を「症候としてのことば」から分析したのであり、以下では「症候としてのことば」とい

う云い方をとる。これはひろく「徴候としてのことば」の病理的進行状態を多かれ少かれ指している。

ところで、このような「徴候としての身体的・感情的表現」をことばとして始めて明瞭に分析してみせたのは、フロイトの『夢判断』（1900年）であり、それは、精神分析による新しい「ことば」の発見でもあった。フロイトの考えによれば、精神分析的立場からする精神病理学からは、身体的・感情的表現の手段としての「しるし」がことばと結びつくのではなくて、そのような「しるし」が「ことば」そのものなのである。ことばを変えていえば、「身体それ自身が語るのである。」¹⁾

- 1) Julia, Kristeva, *Le langage, cet inconnu, Une initiation à la linguistique*, Éditions du Seuil, p. 269. J・クリスティヴァ『ことばこの未知なるもの——記号論への招待』谷口勇、枝川昌雄訳、文化書房、1983年、393 ページ。

このことは、一見、精神分析学がとり扱う「身体の徴候」としてのことばに、かつての自然的共同体における「了解」のための一連の「しるし」——表情、身振り、音声及びそれらと直接結びついたことば——そのままの復活であるかのような外観を与える。だから、フロイト自身も、彼のいう無意識の概念を含んで「徴候としてのことば」は「原始言語」の作用を保持しているという意味のことを、『夢判断』のなかで次のように述べている。

「今日象徴的に結合されているものも、大昔におそらく概念的同一性や言語的同一性によって結合されていたのであろう。象徴関係は、かつて存在した同一性の残滓であり且印なのだと思われる。そのさい、象徴共同体は若干の場合にあっては言語共同体をはるかに越えて拡がった存在であることが観察される。数ある象徴の中には、言語ができ上がった場合形成されたような古いものもある。」¹⁾

- 1) フロイト『夢判断』高橋義孝訳、フロイト著作集、第二巻、人文書院、1968年、291—2 ページ。(S. Freud, *Die Traumdeutung*, 1900)

ところで、その際、身体的・感情的表現としての「しるし」が一見「原始言

語」としての要素を保持しているようにみえても、これらの「しるし」を概念・ことばとしての「しるし」から分離し、独立した姿として単純にとらえることはできない。すなわち、すでに「美しい魂」のところでみたように、それらを市民社会的関係の成立期に、「同一化」作用が還帰しようとしたロマン主義的ことば——詩的言語と直接結びついた一連の「しるし」の単純な復活とみることはできない。

というのは、市民社会的関係の矛盾の深化のもとでの一連の「しるし」の「差異化」—「個性化」,「画一化」,「類型化」の不安定性は、身体と感情の具体的表現が、抽象的・一般的なもの「転倒」としてあらわれるからであり、そのことが、「症候としてのことば」の具体化のなかにあらわれるからである。この場合、「転倒」とは、身体と感情の具体的表現が「しるし」の「差異化」—「個性化」—「画一化」—「類型化」をそのままに表現するのではなくて、いわば、その具体的表現のなかに、画一的・類型的「同一化」と同時に、それを拒否する具体性を内在させざるをえないということであり、「症候としてのことば」は、その具体性のなかに、画一的・類型的「同一化」に対立する「非疑似的個性化」への道をはらんで成立せざるをえない側面をもってあらわれるということである。ここでは、「差異化」—「疑似的個性化」→「画一化」—「類型化」が「再転倒」させられて、「画一化」—「類型化」→「非疑似化」—「個性化」が内在的に表現されている。だから、それは、抽象的概念・ことばからの具体的な身体・感情的「しるし」のたんなる分離ではない。「症候としてのことば」は「再転倒」された現象、つまりは、現実の転倒としての「物化」—「物象化」のもう一度の「転倒」であるから、市民社会的関係の一般性と抽象性を、その限りでは表現しており、それは無意識のうちにはあっても、その症候のなかに、秘められた形で、市民社会的関係がつくりだす「物化」—「物象化」の事実が直観されている。つまり、それは「症候としてのことば」・「しるし」を、市民社会的関係のなかに内在化させているという意味では、まさに「病状的」である。しかし、同時にそれは、そのような「物化」—「物象化」された形で進行する画一的・類型的「同一化」の普遍化に敵対する関係、すなわち、そのような「同一化」を拒否する関係が無意識の

うちにふくまれており、まだ即自的ではあっても、非疑似的な、したがって、真の個性化への道への要求を含んでおそらく構造化されている。

J・ラカンが、「無意識とは他者からのディスクールである」¹⁾と述べた理論的命題の革命的意義は、無意識を、個人における自然的な「しるし」にたいする「社会的なもの」の抑圧の表現としてみるだけではおそらく理解できないであろう。個人の「症候としてのことば」としてあらわれる無意識は、他者のディスクールに構造化されているところの、市民社会的関係の矛盾の深化のもっとも激的なあらわれ、すなわち、社会的関係の「物化」—「物象化」の一般化・普遍化をふくんでいると同時に、その「転倒」すなわち、そのような一般化・普遍化を拒否する「個性化」への意欲をふくんでいるのであり、このような関係の「転倒」への可能性をその具体的姿のなかに普遍的に侵入させているのである。

1) Jacques Lacan, *Écrits*, Éditions du Seuil, 1966, p. 16. J・ラカン『エクリ』

I 宮本忠雄, 竹内迪也, 高橋徹, 佐々木孝次共訳, 弘文堂, 1972年, 13ページ。

だから、このことは、「症候としてのことば」の人間的解放が、たんにルソーのいう、情念に起源をもつ言語¹⁾の原始的状态そのままの解放、すなわち、情念的解放を意味しないことを予想させる。

1) ルソー『言語起源論』小林善彦訳, 現代思潮社, 1970年, 21—2ページ。(J. J. Rousseau, *Essai sur l'origine des langues*, 1761)

すなわち、そのような具体的な「しるし」の具体的解放は、そのままでは、情念的にはおこなわれたい、と思われるからである。現代情念論においてしばしばとりあげられる情念的解放が、このようなレベルにとどまっているかぎりでは、それは、真の「しるし」の人間的解放にはつながらないだろう。

その場合、そうした情念的解放が「しるし」の真の人間的解放の最初の出発点となりうる場合があったとしても、そのレベルでのことばの概念と身体的・感情的「しるし」の融合という道すじが、現代において人間的解放を推進・完成させるのではない。いわゆる現代のパフォーマンス論が、このような意味

で、現代における「物化」—「物象化」の関係の革命的变化を展望しないかぎり、それは、たんなる情念的解放にとどまるだろう。

そうではなくて、J・ラカンのいう無意識が、他者のディスクールに構造化されているという意味を、「しるし」の人間的解放という観点からとらえるならば、それは必然的にことばが社会的関係の「物化」—「物象化」において、他者を画一的・類型的「同一化」という関係へとさそうと同時に、ことばによる関係そのものが必然的に、そのような「同一化」作用の普遍化によって作りだされる自己意識、すなわち、アイデンティティの「幻想性」をつねに破壊するということを示している¹⁾。

- 1) H・ラング『言語と無意識—ジャック・ラカンの精神分析』石田浩之訳、誠信書房、1983年、参照。(H. Lang, Die sprache und das Unbewußte, Jacques Lacans Grundlegung der Psychoanalyse, 1973)

そのようなことばを発見すること、そのようなことばを選びとること、そのようなことばを使うことに責任を負うことの、いわば出発点に「症候としてのことば」の意味があるのであり、後者は、前者のぎりぎりの出発点になりうるという意味において、さきの「転倒」はリアルな意味をもちうると考えられるのである。その意味で、またその意味でのみ、症候と病状¹⁾は人間的解放の出発点となりうる。

- 1) ここで「症候」及び「病状」というのは、もちろん病理学的な意味につかわれているが、それはより広い意味での、社会的矛盾のもたらす非人間的「しるし」の人間的「しるし」へのぎりぎりの転換点という象徴的意味を含んで使われている。病理学的な意味で使われている場合にはいうまでもなく治療が前提となっている。

だから、ことばは、あくまで、コミュニケーションの手段であるが、ここで新しいことばの選択が意味するところのものは、「物化」—「物象化」された関係での、その画一的・類型的「幻想化」を拒否するという意味において、そのような「同一化」作用を拒否するということである。「症候としてのことば」は、そのようなことばの、ぎりぎりの表現である。だから、さきの「転倒」のなかには、かつて「物化」—「物象化」によって「転倒」されたものの、「再

転倒」のモメントがふくまれている。そして、そのようなことばの発見こそ、市民社会的関係の「物化」—「物象化」を「転倒」させていく文化的役割をになうのである¹⁾。

- 1) この点については、カレル・コシークが「異化」ということで説明している。
(cf. Karel Kosik *Dialectics of the concrete*, D. Reidel Publishing company, 1976, p. p. 48—49 カレル・コシーク『具体的なものの弁証法』花崎 泉平, せりか書房, 1977年, 96—7 ページ参照。)

(5) 「しるし」の時間性について

ところで、前節のおわりで、市民社会の「物化」—「物象化」を転倒させることばの発見は、自己意識がもつアイデンティティの「幻想性」を破壊するといったが、それは、自我の内面にどのような形であられるのだろうか。

J・ラカンが、「鏡像段階」についての彼の論文「＜わたし＞を形成するものとしての鏡像段階——精神分析の経験がわれわれに示すもの——」¹⁾のなかで、或る年令の幼児が短い期間ではあっても、一定の期間、道具的知能ではチンパンジーに劣りながら、早くも鏡のなかで自己の姿を認知する、いわゆる「鏡像段階」での現象の基本的性格を、錐体路系の解剖学的な未完成さとか、母体の体液的な残存状態にみられるような、「特異な未成熟性」をもって生まれてきた子どもが、自己の身体的同一性をまだ充分に感覚できない時期に、すでに自己をその鏡像において認知しようとする「同一化」だ、と位置づけている。そして、ラカンによれば、子どもが、自己を鏡のなかのもう一つの自己のイメージに重ねる「同一化」の形態は、すでにこの段階において、自己を全体としてとらえられない「寸断された身体感覚」を、一種のまとまった幻影としての「鏡像」のなかで統一しようとする事実——＜わたし＞を社会的に加工された諸状況へ結びつける弁証法の端緒として示している²⁾。このことは、すでにつくられた文化のなかで、他者との依存関係においてしか生きられない赤ん坊の最初に経験する自己意識の「同一性」が、はじめから、ある全体性とそれらの分断性とのするどい緊張のなかにおかれており、それが直接的かつ即自的なものとしてではなく、自己からはなれたもの、広い意味での「自己疎外」さ

れたものをとおしてしか現象しえないこと、それは自己意識としては、自己が出会う他者——はじめはもっとも緊密な関係をもつ母親、そして次第に周りの人びと——と自己との「想像的同一現」によってしか具体化されないことを示している。つまり、自己意識の「同一性」は、その最初から、ラカンがいう「想像的情念」(passion imaginaire)の発達をとおして、また「想像的相互主体性」においてしか結実しないのであって、その意味では、つねにある「幻想性」をともなわざるをえない。そして、このことは、ものごとの普遍的な象徴であることばの獲得以後においても続くのであるが、とりわけ、ことば以前の「体験的ふれあい」(contact éprouvé)³⁾において典型的にあらわれる。何故なら、このような形態においては、自己意識のレベルにおける「同一性」は、ことばのような客観的対象をもつことができず、主観的な幻想性をとおしてしか具体化されえないからである。しかし、ことばの獲得が、この「幻想性」をまったく止揚するのではない。象徴的秩序としてのことばの獲得は、自己意識の「同一性」にたいして、例えばフランス語の Je とか moi とかというような、一般的・普遍的なこととして示されるので、たしかに、さきにみた「体験的ふれあい」に比べて、一見、この「幻想性」を打ちやぶるかのようにみえる。しかし、ことばは、別の意味では、さきにみた自己意識の「同一性」の「幻想性」にさいして一層の増幅をもつくりだす。例えば、あることばが、さきにみたような「幻想的自我」のイメージに直接結びつけられる場合には、このことは、たちどころに明らかになる。子どもが自己のイメージを、「お利口な子」とか「いい子」または「お馬鹿さん」とか「悪い子」などとして固定化させる場合には、そこで使われる形容詞は自我の「同一性」の「幻想性」をまさに典型的に示すものとなる。ことばは主体が対象に客観的に働きかけ、対象を変革するところの、時間性と空間性のなかに、主体自身が生きていることの反映である限りでは——別のことばでいえば、主体自身が対象としてたちあらわれ、ことばがその対象の反映である限りでは——さきの「幻想性」を明らかに打ちくたすが、同時に、そうした主体が、対象に働きかける場合、ある先行したイメージを内面につくりだし、そのイメージを自己のなかで主観的に統一しようとする限りでは、ある「幻想性」をまぬがれないばかりか、一層そ

れを強める働きさえする。だが、そのことは、とりわけ、対象に働らきかける人間の対象的活動が「物化」—「物象化」される傾向をもつ市民社会的関係のなかではどのような形態をとるのだろうか。

- 1) J. Lacan, *Écrits*, Éditions du Seuil, 1966. p. p. 93—100. J・ラカン『エクリ』I 宮本忠雄, 竹内迪也, 高橋徹, 佐々木孝次共訳, 弘文堂, 1972年, 125—133ページ。
- 2) Op. cit., p. p. 96—98. 同上, 129—131ページ。
- 3) H・ラング, 前掲書, 72ページより引用。(ラカン「精神分析における言葉と言語活動の機能と領野」より。)

J・ラカンは、さきの論文のなかで、人間の「自我機能」が発生する事実のなかに、それが必然的に「幻想性」、すなわち、「自己疎外性」をもたねばならないことを、文化のなかで相互依存的に生きていかざるをえない、類としての人間の本質として描き出しているように私には見える。しかし、そのことは、「物化」—「物象化」された関係においては、どのような姿で具体化されるのだろうか。さきの問いはこの問題と関連している。

ここでラカンのいう「自我機能」のもつ本質的自己疎外性の仮説を、「自我機能」が、その形成の当初から、「全体性」と「分断性」との弁証法的関係のなかに具体化されるという考え方で根拠づけることが正しいと判断されたとしても、この仮説を「物化」—「物象化」された世界のなかで展開するには注意を要する。

なによりも考慮しなければならないのは、「物化」—「物象化」された関係における「同一化」作用が、まさに主体の相互関係の客観化である、ものまたはものごとをとおして現実化されるという意味において、またその客観化が自己意識をもふくめて主体のあらゆる性質や意識に及ぶという意味において、「同一化」作用自身は、外面的には、さきに述べた「幻想性」をまぬがれるように見えるということである。この意味では、自己は、「物化」—「物象化」された関係のなかで、自己を不断に客観化する手段をもつ。しかし、同時にそのことは、前節でも述べたように、「同一化」作用における「差異化」ともなう「画一化」—「類型化」をも不断におしすすめ、そのような「同一化」を

拒否し、個人の個性を自覚せざるをえない主体の潜在可能性をも生みだす。このような場合、個人が自己の個性の「同一性」を自覚する内面的な「しるし」は、何によって他者に表現され、他者によって認知されるのだろうか。いいかえれば、自己の個性の形成のプロセス——その過去・現在・未来をとおしての「同一性」は、どのような「しるし」によって証しされるのだろうか。その時、身体的・感情的諸手段とことばとの関係は、内面的にはどのようにつながってくるのだろうか。

さきにふれた、新しいことばの発見という仮定は、この解明なしには不可能である。

ところで、個性の形成は、差異化をともなう画一的・類型的「同一化」の拒否という、否定的な契機をとおしてのみ、実現され、表現されるのだろうか。それは、「物化」—「物象化」された関係においては、肯定的な表現形態をもたないのだろうか。

「しるし」は、外面的なあらわれである限りにおいて、表情であろうと身振りであろうと、音声であろうと、またことばであろうと「空間化」されているが、それらは同時に「時間化」されてもいる。「しるし」の「時間化」とは、これらの「しるし」がたんに、事態の時間的連続性のなかにくみ込まれているという意味ではない。「時間性」は、ある空間に表現されたその性質のなかにも、過去・現在・未来を貫ぬいた時間が瞬間のうちに、内在化されていることを意味する。

だが、「物化」—「物象化」はこの「時間性」を、「空間性」へと転化させてしまうので、「しるし」の「時間性」を見えなくなせてしまう。いわば、「しるし」の没個性化は、「しるし」のもつ、この「時間性」を外적におしかくすだけでなく、内的にもおおいかくしてしまう。だから、他者の「しるし」に「同一化」している画一化された個人は、厳格な意味での個人ではすでになく、アトムとして、ただ瞬間にしたがってのみ生きざるをえない、全体のなかのそれである。

しかし、「物化」—「物象化」された関係は、そのような「同一化」を拒否するモメントをふくんで展開する。この拒否は、さしあたってどのように内在

化されて、「しるし」にあらわれるのだろうか。

さきに「拒否」は、「症候としてのことば」、すなわち、身体的・感情的（情動的）症状としてあらわれるといったが、それは、身体と感情（情動）の安定と不安定のゆれ動き、その分極化として具体化される。そして、そのことが、なによりも画一化された個人の「時間意識」の疎外から個人を、新しい苦しみをともなう目ざめさせるようにうながす。それは、根底において、市民社会的関係における安定と不安定の分極を反映している。

ここで市民社会的関係の矛盾の身体的・情動的表現である「不安」についていえば、それは、「不安の哲学」がこれまで明らかにしてきたように、人間が「時間意識」を持ち、現在が自己の死と無へと根本的につながっていることにおいて、人間の実存意識の本質を示しているが、市民社会的関係においては、それは、直接的には、未来のことがらが、市民社会的関係のなかで、自己の義務と責任をはたしうるかどうかという、倫理意識のもっとも原初的な不安感の形態、いわば、強迫的な「責任感覚」の不安定としばしば重なりあっている。そして、この不安感、市民社会における競争の激化のなかでは、個人の「自尊心」の安定と不安定のはげしい分極化と結びついている。この不安感、自尊心の対象化、つまり敵対的競争のなかでの欲望の「物化」—「物象化」関係へのくみこまれとその量化の程度に応じて、いっそうはっきりと表現されるので、よりはげしくかきたてられる。例えば、現代における登校拒否児にみられる、その罪悪感と不安感のゆれ動きは、今日の家庭と学校における疎外感のもっとも端的な表現であるが、それは精神分析でいう、もっとも広義における、「罪責感」のいわば、市民社会的関係の矛盾の深化の特殊的形態としておそらく位置づけられるものである¹⁾。

- 1) この点については、『現代社会における発達と教育、研究報告集、現代社会における発達と教育研究委員会編、1984年3月』における「思春期グループの討論のまとめ」（山田康彦）を参照。

こうして、未来への不安、未来のみとおしにおける不安定性は、今日において、たんに未来が見えないという姿であらわれるだけではない。もっとも根源

的には、その特徴は、市民社会的関係における矛盾の深化が、時間意識の不安定性のもっとも原初的な姿であられるという点にある。つまり、画一化・類型化への拒否は、まず、「物化」—「物象化」された時間意識にもっとも根底的に不安のゆさぶりをかけるのである。それが「同一化」作用の「拒否」が、形のうえでは、新しい時間意識のいわば、「症状的復活」の姿であられる原因である。もっとも、このような「症状的復活」はさまざまな苦しみをともなっているであられるので、実は時間意識の「物化」—「物象化」は、ある意味では、そうした不安感のおおいかくしをも意味し、一時的には外面的・疑似的幸福感（気分）を主体にもたらしもする。だから、市民社会的関係の矛盾の深化のなかでは、子ども・青年だけでなく、大人もまた、未来への不安感を一時的に麻痺させるような必要性を日常的にもっている。

だが、つかのまの、この麻痺は、常にするどい時間意識の「症状的復活」によってさえぎられるので、その真実の姿をあらわにせざるをえない。その際、主体は、しばしば、未来へのこの不安を、もっとも原初的な身体的・情動的表現——過去への退行にうったえるので、「同一化」作用への「拒否」は、時間意識の、過去・現在・未来への連続性のするどい再編成へとみちびくことになる。そして、この再編成は、過去の回想のなかに、自己をしずめることによって、しばらく休息のイメージを獲得することもある。「回想」はキルケゴールのいうように、たんなる「記憶」ではない。「回想」の本質は、「遠くへ移すこと、距離をとることである」¹⁾ とキルケゴールが云う時、それはある「理想性をもって過去が現在によびさまされる」ことを意味している²⁾。「回想」はしばしば、大人がするように、幼時の理想的な平安へのノスタルジーにひたることとして経験される。だが、新しい時間意識の再編成は、このようなノスタルジーへの一時的とらわれによって、成就するのではない。市民社会的関係の矛盾の深化によってもたらされる不安定は、一方で、主体にこのノスタルジーの「幻想性」を無条件に受け入れさせるが、それは、同時にいつまでも、このロマン主義のうちにとどまりえないことをもうながしている。

1) キルケゴール『人生行路』の諸段階』，上著作集12巻，佐藤晃一訳，白水社，1963年，22ページ。

こうして、人びとは現在の不安定を、そのまま受け入れることをとおしてしか、その個性を主張することができないことを、長い間の葛藤をとおして知った時、画一性・類型性への拒否をとおして、各自がそれぞれ独自の苦しみを負って生きている個性であることをみとめあうのではないか。その場合、現在の不安定への拒否的「症候」も、過去の安らぎへの退行的「症候」も、ともに、過程的意味をもつようになる。そして思うに、そのような過程をとおして、相手のなかにもっとも個性的な苦悩の刻印を深く読みとった時、人は、相互に拒否することなく、その苦しみの徹底性のなかから、各人を、自立した個人としてみとめあうようになるのではないか。これを一種のリアルな時間性の意識化といっけなだろうか。

その場合、個人は他者の身体的・情動的「しるし」のなかに、そのような苦悩にみちた時間性の内在化を自己の経験をとおして直観することができるばかりではない。その時間性の内在化を、自分史（自己史）のたえざる反復・定着に示されるような時間意識の事物化をとおして、まさに確信していく。

だから、新しいことばの発見は、過去・現在・未来をとおして、自己の時間意識が、現在の苦悩の原因の全身体的・感情的追求の徹底を前提としている。徹底とは、安定と不安定とのたえまのない動揺と分極化が、その幻想性を払拭していく過程であり、これこそ、「同一化」作用の「物化」—「物象化」への傾向がつくりだす前提である。そしてまた「同一化」作用の「物化」—「物象化」の傾向は、この前提をとおして個人を「さめた」状態にみちびかざるをえない。このさめた状態を、苦悩の徹底性がとらえる時、それは、過去・現在・未来の時間意識を、苦悩のことばとして、対自的ならしめるのである。そして、それこそが、おそらく苦悩そのものをも乗り越えていく方向性を示すのである。

それは、苦悩のまさに対象化、ことばをとおしての、その乗り越えである。新しいことばの発見は、その意味で、ことばの「時間性」の発見である。そのようなことばが、その個人の時間意識のなかで、徹底的に必然性をもってあらわれていくかどうか。そのようなことばがたんに、身体的・感情的うながしの即自性において使われているのではなくて、市民社会的関係の矛盾の深化を耐

えて、そのなかでの苦悩を引きうけるような個性的意味をリアルにふくんで使われるようになっているかどうか。——こうした問いが、新しいことばの発見の中核に位置づく。「苦悩をつきぬけて歓喜へ」(Durch Leiden Freude) というベートーヴェンのことば¹⁾は、或る時間意識を表現している。だが、それは、市民社会的関係の矛盾の深化のもとでは、おそらく、かつてのような高揚したロマン主義的形態をとらないかも知れない。だが、思うに、深い苦悩が、同時に「さめた」魂の状態と結びつきながら、画一化され類型化された「同一化」を拒否しあう個人として、人びとが相対して登場する時、人は苦悩と歓喜とのあいだにむしろ苦悩のカタルシスとしての笑いを幾重にも経験する。そしてこのような笑いは、非人間的な「同一化」を拒否しながら、なおも、個性相互の「同一化」へとむかおうとする、人間のアンビバレンツを、不調和な状態への、ぎりぎりの適応をあらわすのではないか。かつてベルグソンは、まず笑いを、人間の肉体が、こわばって「機械になったような状態」が引き起こす「おかしみ」の表現としてとらえたが²⁾、このことは、おそらく笑いが画一的・一類型的「同一化」への拒否とそこからの離脱の過渡的表現であることを示している。ベルグソンは、さきの書物のなかで、「物化」—「物象化」について語っているわけではないが、彼の笑いの考察には、現代における人間身体の「人工的機械化」という、自己疎外への批判が明らかにふくまれている。だから、さまざまな笑いは、この観点からすれば、苦悩する個性の相互承認にいたるまでの里程標ともなりうる。そして、笑いが、こうした苦悩する個性の相互承認へと導く時には、そのもっとも意識的な形態である「微笑」の「しるし」へとおそらく導かれることになるだろう。何故なら、「微笑」こそ、苦悩の徹底をとおしての、もっとも節度ある個性の相互承認だからであり³⁾、人間的につながり合う人間における「苦悩」から「微笑」への道は、ある意味で、このような時間意識のもっとも労苦にみちた感情的自覚、その意志化を示している。

1) ベートーヴェン、1815年10月19日エルデーディ伯爵夫人への手紙(ロマン・ローラン『ベートーヴェンの生涯』片山敏彦訳、岩波文庫、1965年、68ページ)(Roman Rolland, Vie de Beethoven, 1903)

2) ベルグソン『笑い』林達夫訳、岩波文庫、1976年、48—59ページ。(Bergson,

Le rire, 1900)

- 3) アラン『人間論』井沢義雄訳、角川文庫、1963年、222 ページ 参照。(Alain, Esquisses de l'homme, 1937)

だが、「微笑」がこのように、意志の最高の「しるし」としての、笑いの「完成」であるとしても¹⁾、それは、現代においては、アランの師ラニョーがいうような古代的な「プラトンの微笑」の復活²⁾ とはおそらくならないだろう。なぜなら、M・ピカートも示唆しているように、古代ギリシャ人の表情が、キリストの受難に象徴される苦悩によって決定的に変化したと考えるならば³⁾、「微笑」もまた、幼児のそれのもつ「自然性」を一度は徹底的にそぎおとした上で、意志的な深まりへと達せざるをえないだろうから。

- 1) アラン『著作集1, 思索と行動のために』中村雄二郎訳、白水社、232 ページ (Alain, Éléments de philosophie. 1941)

- 2) 同上 384—5 ページ参照。

- 3) M・ピカート『人間とその顔』佐野利勝訳、みすず書房、1959年、167—177 ページ。(Max Picard Die Grenzen der physiognomik, 1952)

笑いが不安の安心への、また安心の不安への転化の時間的過程を内在化させる身体的・感情的「しるし」であるとするならば、この過程を、市民社会的関係の矛盾の深化のなかで、幾度となく経験する現代人は、限りない種類の笑いのなかから、「微笑」をある意味で選択せざるをえない必然性をもっているように私には思われる。卑屈な、うっ屈した笑い、またはカーニバル的な爆発する笑い、人をさす、しんらつで皮肉な笑い。笑いは「同一化」とその「拒否」の間をゆれ動きながら、個人と集団を引きつけ、また引きはなす。しかし、最終的には、徹底的に苦悩する個性を承認し合う個人相互は、あらゆる不寛容を通り越えたそのはてに、新しい「共生」の関係——個性を無視して「一体化」するのではなく、個性を認めあい、「微笑」に象徴されるような意志的な「しるし」で結びあるような関係へといたらざるをえないだろう。そして現代におけるあらゆる非人間的なものへの闘いがこのことを現実化する。

こうして、新しいことばの発見も、「微笑」の発見のように、意志的なもの

となるに違いない。それは、対人関係のなかでの希望と絶望に満ちた時間意識のさまざまな試練の結果であるだろう。そしてそのことが、おそらく拒否する個性をそのまま相互にみとめ合う個性たらしめる。それは、幻想としての未来とその上にたつ、いつわりの空虚なことばを拒否する。空虚な、空しいことばが、新しいことばの発見へとつながらないのは、つくられ、無理に演じられる微笑が、真の個性の承認へと導かないのと同様である。自覚した現代人は、いつわりの空虚なことばといつわりの微笑を演じるよりは、他者を拒否し、それに抵抗することを選ぶだろう。

これが、人間が苦しみと弱さとの自覚において、まさにつながり合うとした『エミール』の著者の思想¹⁾の現代的表現ではあるまいか。そして、このような苦悩の徹底とその乗り越えこそが、おそらく時間意識の肯定性を、ぎりぎりのところで「しるし」から引き出すことになるのではあるまいか。

- 1) ルソー『エミール』中、岩波文庫、今野一雄訳、1963年、36—7ページ。
(Rousseau Émile ou de l'éducation, 1762)

(1984. 12. 1 稿)

(1985. 10. 29 加筆)

〈付記〉 本稿は、未定稿として、東京都立大学大学院ゼミナール（1984年度）での検討のために提出した「現代における子ども・青年の『同一化』(identification)作用の危機と教育実践の基本構造について」の前半、第1章第1節～第5節までの部分を若干加筆したものである。なお、同未定稿は、教育科学研究会発達研究会（1985. 3. 29—30）にもそのまま検討素材として出され、多くの方々から御意見をいただいた。記して感謝の意をここに表したい。（1985. 10. 29）